日本再生における政治の役割

2012年9月3日

ＮＰＯ法人日本再生プログラム推進フォーラム理事長　藤原直哉

（第１章　政治のリーダーシップ）

１、政治のリーダーシップは国民を思想、理念で縛らない

さて、日本もいよいよ後がない状況に追い込まれてきているわけですが、日本を再生するに当たってはどうしても政治が動かなければなりません。そこでまず「政治のリーダーシップ」ということで考えてみたいと思います。今、本当に政治が乱れに乱れているわけです。非常に怪しげな人たちが政治の回りに取り巻いていまして、これは国内、国外ともにそういう状況です。このまま行くと本当に悪い渦の中に日本全体が巻き込まれていってしまうという、非常に危機的な状況になってきたというように思います。いろいろ小さな政党も出てきていますが、今ひとつ何か全体を包んで大きな力を日本全体に与えるようになかなかなっていないのが現状です。

全体を見渡してみると、どれもこれも与党も野党も、今ひとつ政治の根本的なところで視界が開けないために、大きな動きとして日本が政治的にまったく前進しない、そういう状況になっていると思います。やはりそれは基本的に政治のやっていることに間違った部分があるのではないかと私は以前から思っています。私自身はリーダーシップの研究や教育をやっているのですが。根本的に政治のリーダーシップというのは実はひとつの組織のリーダーシップとはだいぶ違う部分があるのです。

実は政治のリーダーシップというのは組織のリーダーシップと違って、理念で人を縛るということをやってはいけないのです。

これは皆さん意外に思われるかも知れませんが、政治のリーダーシップは理念で人を縛るとうまくいかないのです。組織のリーダーシップというときには、まず基本的には組織の理念というものを決めて、理念に合う人を集めてきます。理念に合う人を集めてこないと組織はきちんと動きません。ですから、一つひとつの組織、企業は理念に従って人を集めてくる。だからまず明確な理念を決める。理念の中には自分たちは何をするのか、守るべき価値感、そして自分たちのビジョン、こういうものをしっかり決めた上で人を集める、これが組織のリーダーシップの基本なのです。しかし、ちょっと考えると分かるのですが、政治が相手にする集団というのは、実はものすごく多様な人たちなのです。

一つひとつの組織や企業は、ものすごく多様な人たちの集団から一部の人たちを選んできて、理念に合う人たちで運営することが可能です。ところが政治が相手にするところの、国の母集団というか国民全体というのは、実は個々の組織や企業に選ばれなかった人もそこにいるわけで、母集団は非常に多様な人たちで構成されています。右翼も左翼も、お金を持っている人も持ってない人も、お年寄りも若い人も、勤勉に生きることが好きな人も嫌いな人も、いろいろな人がいます。これを例えば組織のリーダーシップのように、１つの価値感でまとめた場合に何が起きるでしょうか。実はこれはよく考えれば分かるのですが、

これは全体主義になってしまいます。

教育によって 1 つの方向に向かせようとするまではいいです。それが教育ですから。しかし、そもそも教える方にもいろいろな考え方がありますから、教育の内容はひとつになりません。さらにどんなに一生懸命教えても、教育を受ける側が教育の結果、1 つの方向に向くということはないわけです。どんなに教育しても、依然として多種多様な人たちがいます。このばらばらな人たちを、それでも無理やりベクトルを合わせようとすると、これがものすごく無理が生まれて、戦時下のような大変息苦しい社会になってしまうのです。ですからまず政治の世界では、思想で人々を縛るということを、これはやってはいけないのです。ですから組織のリーダーシップの中に一番初めに出てくるところ、すなわち人々を思想、理念に従って統合するという部分がまずないのが、実は政治なのです。

ですから、これはちょっと考えてみると分かるのですが、右翼の政治、左翼の政治とよく言われます。いろいろな政治指導者がいます。しかし理念というものは、実はすべての人たちに強制されるべきものではなくて、理念を持った人たちが具体的にどんな政治をするかというところで評価されるべきものなのです。ですから右翼だろうが左翼だろうが、自分たちが持っている理念を人々に強制するわけではないのです。では政治とは一体どうしてみんなが 1 つの方向に結果的に向くことができるのだろうか。国としてのまとまりというものはどうしてできるのだろうか。思想や理念を統合しなくても、どうして右翼も左翼も、お金持っている人も持っていない人も、勤勉な人も勤勉でない人も、なぜみんな 1 つの方向に向くことができるのだろうか。これは非常に面白いことだと思いませんか。

歴史を見ても現代を見てもそうですけが、栄えている国、栄えている文明ほど、実は人は生き生き、伸び伸びと暮らしています。栄えているというのは全体がひとつによく統合されていて、そしてみんなが 1 つの方向に向って動いているなという感覚をみんなが共有している。それは実はリーダーシップが非常に整った状況です。でもそういう状況というのは、一つの思想、理念にみんなが不自由に縛られているのではなくて、みんなはつらつとものを考え、行動していることが多いのです。ですから一見矛盾のように聞こえるかもしれませんが、思想や理念を政治家が強力に言わないときほど、実は国はものすごく発展している。反対に国が思想だとか理念だとか、果ては行動まで一人ひとりを監視して厳しく締め付けるときというのは、力学的に考えたら、むしろ国はうまくいっていない。一見、思想や理念を強く打ち出す国はものすごくしっかりとリーダーシップが整って前に進んでいるように思うかも知れませんが、むしろ現実は反対なのです。思想や理念で国民を厳しく縛れば縛るほど、その国は力が無くなっていって、北朝鮮を見れば分かりますが、ほとんどへたれ込みの状況になっていきます。ですから思想とか理念というものが全面に出てきて国民全体を縛るときというのは、実は、国が衰退しているときなのです。反対に国がどんどん伸びているというときは、あまりそういうことを言わないものです。

結局 20 世紀の社会主義、共産主義の嵐、さらに新自由主義、新保守主義の台頭を見ても、いずれも最初に思想や理念で強力に政治に縛りをかけ、国民の発想と行動を強烈に束縛す

る。場合によっては強権政治も持ち出して思想と理念を守る。しかしその政治の現実を見ればごく少数の人がカネと権力を手にしてこれを行使する奴隷制のごときものであり、いずれもそれまでの政治の破綻が生んだ奇形政治のようなものなのではないでしょうか。ですから思想や理念で対決をするのではなくて、それぞれが信奉する政治が具体的に国民にどんな未来をもたらすか、それを冷静かつ現実的に嘘偽りなく提示する、それを政治がやれば自ずと答えは出てきたと思うのです。

２、政治のリーダーシップの求心力は未来を創ることにある

　では一体この政治のリーダーシップというのは何によって動いているのでしょうか。実はこれは非常に重要なことなのですが、政治において非常に重要なことは、未来を創るという部分で人々を結集させるということなのです。すなわち、いろいろな考え方の人がいます。いろいろな立場の人がいます。ですから今この場所で、今現在すべての人たちの矛盾を全部解決するということは、極めて難しいのです、そうではないのです。未来を創る、その未来に向って右翼も左翼も、お金を持っている人も持っていない人も、勤勉な人も勤勉でない人も、時間と共に自分が考えているような良き世界、自分の幸わせというものが、時間と共にだんだん達成されていくのではないかなという感覚を持つと、これが実は非常に大きな求心力になっていくのです。右翼は右翼なりに、こういうふうになればいいなと思っている部分があると思います。左翼は左翼なりに、こうなればいいなと思っていう部分があると思います。お金を持っている人も持っていない人も、勤勉な人も勤勉でない人も、時間と共に未来に向けて、自分の理想像が何となく見えてきて、それを達成できるようになると思うと、みんな自分も未来を創ってみようかと思い始めるのです。政治というのは、今、全部問題を解決しようと思うと、これはまず不可能だと思わなければなりません。

　これは極めて重要なことで、政治というのはもともと 1 つの方向性に合った人たちだけを集めてくるような形ではありません。世の中には実にいろいろな人がいます。見識においても価値感においても能力においても多種多様な人がいるのですから、今この場で全部の問題を解決して、この法律を通せばすべてうまくいくと思ったら、これは絶対に不可能だと思ったほうがいい。そうではなくて未来を創っていく、その未来を実現する中でさまざまな問題を弁証法的に解決し、すなわち問題を根源までたどってその元を直して。みんなが良きように問題を直していって、みんながそれぞれに「あぁ、なんか自分も幸せだったな」と、「幸せな人生を送れたな」と思えるような結果を残すことが大切なのです。一人一人の国民が百パーセイントとは言わないけれど、ある部分、自分の理想が達成できたなと思えるように人々をいざなっていくこと、私はこれが本当の政治のリーダーシップというものだと思うのです。ですから政治のリーダーシップと言ったときには、必ず未来を創るということとセットでなければうまくいかない。思想や理念をいくら言っていても政治のリーダーシップは機能しません。具体的に国民すべてがそれぞれに役割を果たしながら

共通の未来を創っていくという実感と実績を作り上げていくこと、これが政治のリーダーシップだと思います。

未来の姿を明確に設定するから、今日の矛盾を明日に向けて解決できるから、今日の政治のチームワークが整う。わたしは政治のリーダーシップについてはこうはっきり思っていただいてよいと思うのです。例えばアメリカではいつもアメリカンドリームという言葉が使われますが、あれこそ非常に分かりやすい例なのです。アメリカンドリームというのは、時間と共に自分が将来幸せになる。どこの国から来た移民の人も、今貧しい人も、今豊かな人も、みんな未来に向けて夢を実現できる。こういう期待感があるというのがアメリカンドリームです。ですからアメリカンドリームというものがあるからこそ、きょうの矛盾を明日に向けて解決しようというチームワークが、今日生まれる。あれは非常に分りやすい政治のリーダーシップだと私は思うのです。

一方日本のことで言えば、例えば高度成長の時期、あるいはその前の復興の時期、これは誰にでも分かりやすい未来があったわけです。戦後の廃墟からどうやって復興するのか、あるいは戦後の占領からどうやって独立するのか。あるいは貧困の時代からどのように豊かな時代に繁栄を導いていくのか。これは全部、未来を創るということではありませんか。だから日本も大体、昭和の時代いっぱいまでは、みんなで未来を創るということができた。具体的に未来を創るという部分、これがあったからいろいろな価値感の人たち、いろいろな立場の人たちがいても、それなりにみんな協力してチームワークを組んで、共にみんなで成功を達成する、未来を実現するということができたと思うのです。ところがやはり平成になると、未来を創るというエネルギーが特に政治の指導者から消えてくるのです。

もし未来を創るということなしに今の問題を解決しようとすると、政治は単なる権力闘争、損得、強いもの勝ちの世界に堕落してしまいます。あいつが抵抗勢力だから、あいつを倒そうとか、どこに有利な話があるからどこの国に行こうかとか。今の状況の中で問題を解決しようとすると、これは政治が取った取られたの関係になるのです。取った取られた、勝った負けたの関係の外に政治が出てこれなくなります。全部、今、問題を解決しようと思うと。ですから政治はどんどん混迷し、まともな人は逃げて行ってしまって、現在のこの惨たんたる状況に陥ってしまったと私は思うのです。

ですから政治というのは未来を創る過程の中で、今日の問題を解決するプロセスなのです。すなわち政治は未来があるから今日の問題解決ができる、そういうものだと思うのです。ですから政治というのはみんながそれぞれに幸せを感じることができる未来というもの具体的な想定と、その未来の実現に向けて現実的な道をつくるということができなければ、政治は全く不可能だと私は確信しています。

３、政治が説く未来に排除の論理を使ってはいけない

では、そのときに、政治が説く未来というものをどう考えればよいかです。ここは実は単なる自分の夢とか、あるいは空想というものと、政治が達成すべき未来というものの間

には、距離があるということを冷静に認識する必要があります。やはり、ここはちょっと知恵を使わなければいけない部分だと私は常々思うのです。

政治というのはよく整った組織と違って、ものすご多様な人たちを相手にします。ああ言えばこう言う人が必ず出てきます。黒と言えば白と言う人が出てくる、赤と言えば青と言う人が出てくる、上と言えば下という人が出てくる、右だと言えば左が出てくる。それがある意味、非常に健全な世界なのです。何事も作用と反作用の法則ですから。とにかく世の中にはものすごく多様な人がいるのです。

したがって政治で未来を創るというときに、これはよいけれどあれはだめという取捨選択をあまりやり過ぎると、もう今現在が排除の論理になるわけです。今現在が排除の論理になって、一部の人たちが集まって未来を創る。あなたたちはお客さんだからそこにいなさいよ、あなたたちは来てはいけませんよ、ということになってしまいます。したがってこういう未来の創り方をすると、実はいくら時間がたっても人々の不満がある部分消えなくて、やがてそれが反乱、内乱、戦争とかいうかたちになって、最後は一部の人たちの成功をも壊してしまうことがほとんどなのです。そこまで行かなくても未来に期待をかけて圧倒的に高い支持率で当選した政治家が、1年後にはぼろきれのように捨てられるというのも、多くの国民に自分たちの未来が何も変わらない、むしろ悪くなるという不信感、警戒感を持たれてしまうからなのです。

ですからここで我々が非常に冷静に考えなければいけないことは、特に政治の世界において、いろいろな立場の人が国の中にいるというときに、これをえり分けるということをまず発想から除外しなければいけないということです。要するによく考えれば金持ちも貧乏人も無い、右翼も左翼も無い、その違いを超えたところにどのように役割分担で良い社会を創るかという発想を、いつも持たなければならないと思うのです。これは現在のように何事もより分けて、善悪を明確に分けてというリーダーシップのやり方とはまったく反対のように見えますが、実際に我々はとにかく問題があらゆるところで膨らんできて、毎日必死に善悪のけじめをつけてより分けて何とか自分たちだけ生き残ろうとあくせくしているわけですが、実際にそれで問題がなくなる様子はほとんどありません。本当は、やっていることが反対なのです。

良いとか悪いとかいう判断は政治の中では極めて冷静にやらなければいけなくて、いろいろな人たちがいるのだから、未来に向けて、それぞれの人がそれぞれの思いをどうやったら達成させられるのだろうかということを政治は真剣に考えなければならないのです。例えば右翼の活躍の場所はどこにあるのだろうか、左翼の活躍の場所はどこにあるのだろうか。お金を持っている人の活躍の場所はどこにあるのだろうか、お金の無い人の活躍の場はどこにあるのだろうか。もっと踏み込んで言えばお天道さまに対して背を向けて生きている人たちが、どのようにすれば背を向けないで生きられるようになるのかを考えるということ、これが政治がいう未来を創るということだと私は思うのです。

いつもそうやって今生きている人たちが、いろいろな立場の人たちがどんな境遇の人た

ちであっても、将来どうやったら幸せになれるかを、いつも考えて、その未来を創る。すなわち多種多様な人たちの居場所を全部包含した未来を具体的に設計し、建設するということが、政治の具体的な戦略の極めて重要な部分をなしていると私はいつも思うのです。

空想の世界、夢の世界でこうなって欲しい、ああなって欲しいというのは誰にでもあると思います。それは個人的な希望とか個人的な思いということもありますが、それは必ずしもそのまま政治が約束する未来の姿にはなり得ないのです。例えばここにものすごく献身的に世の人たちのために何かしたいと思っている人がいるとします。そういう人たちにとってみると、自分のことしか考えない人というのは実に悪い人なわけです。自分のことしか考えない人たちと献身的に世のために尽くしたいと考えている人たちは水と油ぐらい違うわけです。しかし、非常に重要なポイントは、だからといってどっちか一方を今、完全に排除するということはできないのが政治なのです。

４、多様な人たちが合意できる未来の戦略

やはりそこで見えてくるのは、まず献身的な人たちの影響力をいかに世の中全体に広げるかです。世のため人のために考えて行動している人たちの活躍の範囲をいかに社会に広げていくかです。これが大切です。それから自分のことしか考えない人たちも社会にいるかもしれませんが、やはりそういう人たちも生きていく中で、どれだけ献身的な気持ちと行動を高めていかれるか。具体的な生活や仕事を通じていかに献身性を高めていかれるか、そういう献身性を高めることができる場所というものを、やはり政治や社会のなかにしっかり用意すべきなのです。

人は誰しも最初は自分のことしか考えませんから、自分のことを考えて行動しているうちに、やがてそれが世のため人のためになっているのだということに気付いて、だんだん気持ちも変わっていくのです。すなわちどんな人にも普段の生活や仕事を通じてその霊性を向上させることができる階段を上手に用意するのが政治の妙というものです。自分のために生きながら、なおかつ、より高い次元のものの考え方、行動ができるように、すなわちその人が進化できるように上手に道をつくるということが、政治ではものすごく大事なことだと思うのです。

政治というのは排除から入ったら、基本的に成り立たないと思います。こいつは悪いから排除して、これは違うからどこかへ行ってもらって、残った人たちでやろう。気持ちはよくわかりますが、それは違うのです。そこが政治家の器量の大きさが試されるところです。一部の人を選んで仕事をしよう、それは個々の組織や企業の運営の仕方なのです。それぞれの組織や企業は、ある意味でその選ぶというところが重要かもしれません。やはりそれぞれの組織、企業は非常に大きな力で前進しなければならないところがありますから。ですから組織や企業はかなり具体的に自分たちの思想、理念、集る人を絞った方が、逆にうまくいくと思います。

でも政治は違います。政治の目標というのは、本当に途方もなく多様な人たちそれぞれ

に未来の幸せを届けることです。ですから政治というのは人々と向き合った最初の段階において、それぞれの人たちの花が未来に咲くように、まさに個の花が咲くような、そういう戦略は何なのかということを真っ先に考えなければなりません。ですから例えば貧困からの脱却だとか、占領からの解放というのは多くの人たちにとってはほとんど共通の課題でした。ですからこれはわりと分かりやすい未来の設計図だったと思うのです。とても多くのすごく悲惨な貧しい生活をしている人たちにとってみれば、一日も早くこの苦しみから逃れたいと思うのは当然です。一方お金持ちにしてみても、この戦争という破滅、その後の財閥解体、農地解放、ハイパーインフレによる財産の喪失という一大事に至った最大の原因こそ日本の貧困と国内の対立であり、国民が結束して貧困を克服しない限り同じような破局は避けがたいという厳然たる現実を突きつけられたわけです。

そうすると政治のエネルギーとしてとにかく貧困からの脱却をしようという未来の設計図は、国民すべてにとって合意できる戦略だったと思います。具体的に電気も通して家も建てて、着る物もまともにして、食べる物もまともにして、町をつくって学校も開いてと・・・。そういう一連の近代化のプロセスが国を挙げての政治の未来創りになっていくわけです。

この近代化というのは、貧しい人にも豊かな人にも、右翼でも左翼でも、一様にそれは追いかけることが可能な目標だったと思うのです。ですから世界の新興国を見ればよくわかりますが、現代においても近代化と言われるものが政治の戦略になった場合、大抵それは有効に機能します。さらにもうひとつが占領からの解放です。これも実は韓国、北朝鮮、中国、アジア、中東、アフリカ、中南米と、世界のいたるところで現代的な問題であるわけですが、直接、間接の植民地支配が依然として続いている部分がある。この屈辱的状況からとにかく脱却しなければならない。そういう思いがそれぞれの国や地域に出てくると、それは非常に大きな政治の力として国民を後から押してくると思います。ですからそれは今の日本の外交や世界的な経済関係にとっても、非常に大きな課題になっているわけです。

しかしその一方で、現在の日本国内を見ると、実はそういう近代化とか独立といった、多様な人々にとってわかりやすく合意できる未来の戦略がまだ出てきていないのです。

ある程度みなさんが豊かになってきた。そしていろいろな意味でものの考え方が多種多様になってきた、世界の情勢も非常に複雑に混沌としてきた。こうなってくると今までの延長線上でもっとお金を持ちましょうとか、あるいはもっと組織を大きくしましょうとか、もっと生産量を増やしましょうとか。昔の戦略をそのまま持ってきても、それは極々一部の人たちにしか参加できないし、極々一部の人にしか肯定できないような未来の目標ということになるわけです。やはりどんなにすばらしい社会と言葉で言っても政治の世界はきわめて現実的なものですから、その素晴しさというものがみんなに実感されないと、決して人々は付いてこないのです。ですから近代化、近代化と言っても実際に目の前の自分の前にテレビが来た、エアコンがついた、あるいはインターネットが通じたと、具体的なものがあって初めて、多くの人たちは自分たちが前進したということを悟るわけです。

ですから政治における未来を創る戦略というのは、具体的に何ができるのだろうか。具

体的にどんな科学で、どんな技術で、どんな人たちが集って何ができるのかという非常に冷静な現実の値踏みというもの、未来に向けた科学技術の進化、自然の変化、人の死生観の変化というようなものをしっかり受け止めた上での、きわめて現実的なものでなければならないと思います

ところが今の日本の政治を見ていると、そういう冷静にみんなにとって幸せな未来というものを、考えて創るという部分をほとんどやっていない。政治は今の問題を今、解決しようとのたうち回る、それしかやっていないというのが実態なのではないでしょうか。日本を再生するためにはそういう今の政治の壁をどうしても突破しなければならないと私は思うのです。

５、政治は結果で評価されるべきもの

政治のリーダーシップにおいて、本当にある意味つらい部分というのは、時間がたたなければ今やっていることの本当の良さ、あるいはリーダーシップの姿がなかなか理解されるものではないということです。先に述べたように今の問題を全部この場で解決することができないというところが政治の原点なのだと思うのです。さらに人をより分けるということができないというのも、政治の原点だと思うのです。ですから政治のリーダーシッに対しては必ずいろいろな反発が出てくる、反動が出てくる。だからこそ民主主義というものがあるわけです。反対の人はたとえ法律が通っても、政治の目標である未来が完成したとしても、たとえそれで自分が良き恩恵を被ったとしても、いつまでも反対を貫いてよいという原則がそこにはあるわけです。では一体、どこでその政治が評価されるのか、どこで政治がみんなから肯定され支持されるのか、それは具体的な進化進歩が本当に行なわれたかどうかという点なのです。

賛成している人はもちろんのこと、反対している人たちでも時間がたつにつれて、やはり自分がよいと思っていることが実現されていく。あるいは今まで反対だと思っていたのだけれど、どうもなかなかよいものだと考えが変わってくるような変化が起きることがある。あるいは今までまったく社会の光が当たらなくてどうにもならなくて、もう自暴自棄になっている人たちにチャンスが巡ってくる。こうやって具体的にその人自身と、その人の周囲 3 メートル以内に変化が出てくると、やはりそれは人の気持ちも変わってくるのです。だからどんなに初めの段階でいろいろなことを言われて、いろいろ大変な目にあっても、人々に、本当にすべての人たちにいろいろな変化を起させていって、その変化というものが、だんだんみんなが幸せを感じる方向に向いていくと、これはやがてみんなそれを評価してくれるようになる、政治とはそういうものだと思うのです。

ですから、やはり民主主義というのは、私は非常に興味深い原理だと思うのです。良い原理かどうかは分かりませんが、非常に興味深い原理だと思っているのです。今ここで国民の思想統一みたいなかたちで全部みんなの意見を合わせたりすると、それは全体主義になってしまうからものすごく息苦しい世の中になってしまって、かえって世の中の進化、

進歩にブレーキをかけることになりかねない。だから、思想は縛らない。「ノーはノーでいいです、どうぞ」と。反対でも何でも、とにかく歴史をみんなで刻んでいきましょうよ、進歩していきましょうよと。反対と賛成、立場が分れていてよいではないですか。でも、それぞれに自分がよいと思うことをしっかり行っていきましょうよと。動いていってふと気が付いたら自分と自分の 3 メートル以内に何か良き変化が訪れていたら、これはなかなかすごいことではないですか。そういう行動のツボみたいなものを見つけてみんなで世の中を動かしていきましょうというのが、私は政治のリーダーシップの要諦だと思うのです。

６、政治には未来と足元の 2 つの役割が必要

政治というのは、今この場で何か人々のお世話をするケアマネジャーみたいな人なのでしょうか。あっちで文句が出たからあっちでいろいろなだめ、こっちで文句が出たからこっちでいろいろなだめ。この問題とあの問題をどうしよう。いろいろ問題を聞いて細かく直していく、それが政治なのでしょうか。確かに政治の半分はそういうものだと思うのです。やはり人々のやる気の問題、リーダーシップで言えばやる気の方程式、すなわちやる気が高まる要因とやる気がなくなる要因を区別して考えることが大切だということです。

一般的に言えばやる気が高まる要因というのは仕事が認められる、成長学習する、自由裁量が与えられるというような要因で、やる気がなくなる要因というのは仕事の監督のされ方、仕事の方針、仕事の条件、人間関係、地位、仕事の安定性というようなもので、一般にやる気が高まる要因はリーダーがその環境を作ることはできますが、本当にやる気が高まるかどうかは本人次第であるのに対して、やる気がなくなる要因のほとんどは本人では解決がつかず、リーダーが環境を変えてあげるしかないことがほとんどです。ですからやる気の方程式をもとに考えたら、国民が一人では解決できない問題について政治家はきめ細かく行動して国民の政治参加に対するやる気をできるだけ失わせないようにすると同時に、国民のやる気が出てくるような、仕事が認められ、成長学習ができ、自由裁量ができるようになるような環境をしっかり構築して、国民のやる気が本当に高まってくるのを待つということが大切なのです。これは実は組織や企業のリーダーシップでも同じことです。

ですから、どんなに未来を創ることができる、建設的なやる気が高まってくる要因があるとしても、きょう目の前で重大な問題が起きているとしたら、もうそんな未来を考えたり悠長なことを 3 年も 5 年も続けられない、今この問題を何とかしてくれという、やる気がなくなる問題が強烈にあるならば、政治はこれにしっかり手を打たなければなりません。でも、しかしそういう問題を今すぐこの場で手品のように消してしまうということは一般にはできない。すなわち政治に出てくるような問題を今現在の調整だけで解決、収拾しようとしても、それには限度があるのです。すなわち根本的に多くの問題を解決しようと思うと、それはとにかく時間と共に解決しなければなりませんから、今この場で解決しようと思えば、やはりそれはある程度の限度があるのです、微調整の限界です。でも逆に言う

と微調整の段階でいろいろやってみれば、これ以上はもっと根本的に変えなければ物事が進展しない、こういうことでは駄目なのだから、戦略を抜本的に見直さなければいけないという、むしろいろいろなヒントが得られるはずなのです。

ですから、まず政治というのは、未来に向けてみんなが成功できる戦略をよく考えて創ると同時に、もう一方で、きょう足元で起きている問題についても非常に熱心に、これに取り組まなければいけないということだと思うのです。きょう、人々がやる気をなくす問題に遭遇していた場合、これについて非常に丁寧にその問題を解きほぐすべく、いろいろな行動をするということがまたこれ重要なのです。ですから政治は未来と足元ですね。それは国民のやる気に直結しています。ですから、未来についてよく構想して人々のチームをつくると同時に、足元では丁寧に、まさにどぶ板で走り回って仕事をする。政治には両方がいるということです。ですから両方やってないと、やはりきちんとした政治にはならないと思います。

そして、ここで言う細かく面倒を見るというのも、組織のリーダーシップの世界でよく使われる言葉に、マネジメント・バイ・ウオーキング・アラウンドという言葉があります。どぶ板を歩きながら人々の御用聞きをして、問題解決をしていく。これを英語に直した言葉だと思っていただいてまちがいないと思います。

組織の管理をするときに、リーダーが席に座って人々が問題を報告してくるのを待って、その報告に対処するのではなくて、リーダー自身が歩き回って人々のところに自分から行って、何か問題がないかを自分で探して、見つかった問題に対して対処していく。このやり方が素晴しいということが、もうずいぶん前から組織のリーダーシップのなかで言われています。マネジメント・バイ・ウオーキング・アラウンドというのは、問題が上がってきてから対処するのではなくて、自分で出掛けていって問題を見つけて、先手、先手で手を打っていくということです。大きな問題になる前に、むしろ意志疎通をより図ることによって、問題をよき改善につなげていくような、もっとたくましく自分から乗り込んでいって問題に対処する。これがマネジメント・バイ・ウオーキング・アラウンドで、これが非常に効果が高いと言われているのです。

政治も全く同じだと思うのです。金曜日に地元に帰って火曜日に東京に帰ってくる。その間、政治家も地元で動き回っているようですけども、演説会ばっかりやっていても政治にはならないのではないでしょうか。マネジメント・バイ・ウオーキング・アラウンドをちゃんとやっているのだろうか。いつも見ていて思うのですけども。やはり現場の具体的な問題と未来と、この 2 つがなければどうしても政治は駄目だということです。

７、貧困の結末

その未来を創るということなのですが、今みたいな場合には当然、どうすればそんな未来があるのかという話になってきます。皆さん、ちょっと考えていただきたいと思うのですけども。昔の貧困というのは、ものすごく悲惨なものだったことはお分かりいただける

と思います。とにかく赤ん坊がどんどん死んでしまうし、それから人々もどんどん自暴自棄になっていくし、下手をすれば飢え死にも出るし、昔で言うところの共産主義も入ってくるし。

もうともかく悲惨極まりなくて、こんな悲惨な境遇では子どもの未来はない。未来は絶望だと。もう日本も 6、70 年前までは本当にそういう部分があったのです。すなわちこれは破局が避けられない社会だって、みんな思ったわけです。実際に 20 世紀の前半を見てみれば、第 1 次世界大戦が突如ぼっ発する。あるいはその前に 4,000 年続いた中国の王朝が崩壊する。そして、ロシアで革命が起きる。社会主義政権という、今までまったくなかった政権が突如としてこの地球上に生まれてきて、ものすごい力を持つ。しかし、中をよく見れば虐殺の歴史なのです。さらに 2 度の大戦があって、その大戦の間には大変な世界恐慌というものがあって、結局それがやがて原爆を生み、大変な惨禍を世界中にもたらしたわけです。貧困というものがいかに悲惨な結末を招くのか。貧困というものが入り口で、その最後に行き着いた先に人類の絶滅というものが見えてくる。それはやはりこの 20 世紀前半に、人々が芯から実感したことだと思うのです。

貧しい人たちを放っておくととんでもないことになる。貧困を放置すると人類はおろか地球の破局も避けられない、その本当の恐怖をわれわれはつい 6、70 年前までにちゃんと経験してきたと思うのです。だから戦後、近代化というものによって、考え方だけではなくてもっと具体的に、その人とその人の周り 3 メートル以内の現実を変えていこうということ。これはやはり破局を回避するための生き方を求めようという意味において、非常に重要な政治の選択であったことは、私は間違いないと思うのです。特に戦前の日本のことを考えるならばこの現実は破局を免れない。こんな不均衡と貧困が続いていたのではやがてこの社会は全部終ってしまう。そのものすごい危機感、そういうものが軍の台頭を生み、あるいは社会主義・共産主義の流行を生み、あるいは国家統制を生みと、みんなそれぞれに自分たちにとって良きことだと考えて行動していったわけです。やはりその根底にあるものは、戦前のあのものすごい貧困の世界というものが持続不可能なものだとみんな思っていた、そこに戦後政治の原点があると思うのです。

ひるがえって今のわれわれはどうでしょうか。私は実は今のわれわれの人生もこの社会も、まさに見事に持続不可能な状況にあると、われわれは明確に認識しなければいけないのではないかと思うのです。私は NPO 法人日本再生プログラム推進フォーラムの理事長もさせていただいているのですが。この NPO で最近、絵巻を販売したのです。21 世紀の持続可能なライフスタイルというものを具体的に絵にしたもの。この絵巻を印刷させていただいてみなさまにお配りしたのですが、この絵巻を描かれた先生が非常に重要な示唆を与えて下さいました。

８、破局を回避する生き方

サステイナブルという言葉があります。通常は「持続可能な」という言葉で皆さん訳す

のですが、その一番重要なポイントは、今のこの時代は持続不可能な時代なんだという認識だということなのです。単に持続可能な社会とか持続可能なライフスタイルというと、今のわれわれはこのまま行ってもよいのだけども、もうちょっとやり方を変えてみたらもっと良くなるかな、ぐらいな感じでしか受け取られないかもしれません。しかし、そういうものではないのだと。今のこのやり方はもう行き止まりなのだ。これを続けると破局がくるよと。破局を避けるための生き方を選択しようというのが、まさにサステイナブルなライフスタイルの選択であって。ですから、わたしなりに意訳するならば、サステイナブルという言葉は「破局を避けることが可能な」というように訳すべきなのです。「持続可能な」と言うと、60 の寿命が 70 か 80 か、もうちょっと長生きできるかなみたいに感じる。節約をしていろいろ物を大事にしていけば、それはよい世の中になるけれども、ちょっと酒を飲んだり乱暴してもよいのではないかと。要するに今の世の中の感覚だと、サステイナブルなライフスタイルと言ってもあまり大きな意味での選択ではなくて、今の文明のマイナーチェンジ、省エネ効率化、モラルの向上、健康寿命の延伸ぐらいの感覚でとらえられていることが一般的ではないかと思うのです。でも、それははっきり違うということを、この先生は指摘して下さったのです。違うのだと。よく考えてみなさい、この社会は持続不可能ですよ、破局が来ますよというのです。破局とはみなさんどんなものかご存知でしょうか。これはある種の科学の世界で見えてくるものなのですが、突如として命が絶たれたり、ものすごい暴落が起きたり、あるいは二度と元に戻らないかたち秩序が崩壊してしまうのが破局なのです。

例えば健康というものにも破局があるのです。無理をする。無理を続けるとだんだん体に無理がたまっていきますから、疲れやすいとか、いろいろな健康診断の数値に異常が出る、そういう変化が出てきます、無理をすると必ず変化が出てきます。しかし、この変化が出てきた段階で行き過ぎから戻ってくる、すなわち少々不便を感じるかも知れませんが行き過ぎを改めると、破局はたいてい回避されるのです。こういう生き方が一つある。しかしもう一つは、構わず無理に無理を重ねる。無理に無理を重ねるとある日突然脳出血で死んでしまったり、突然大病を患って入院してしまって、二度と仕事の現場に復帰できなくなったりということが起きるのです

あるいは金融市場においては価格の大暴落というのが破局に相当します。普通、相場は上がったり下がったりしているのですけれども、一方的に上がり続けてしまう。もうとにかくみんなが恣意的に相場のつり上げをやる。こんなバカなつり上げをやってどうするのだとみんなが思う。しかしそれでも上がる。大体その後で破局です。突然価格が一方的に下がりだす。そしてシステムや世の中が根本的に変わるまで、二度と暴落前の水準には価格は戻って来ないのです。こういうことが起きるのです。この破局というのは、事の性格から言って、無理に無理を重ねた状態において起きるもの、そして突然起きるものであって、起きたら生存の可能性や、システムの安定性そのものが全く失われてしまうのです。要するに突然終ってしまうのです。実際に戦前のことを考えてみても、中国は 4,000 年続

いた王朝というものが、今からちょうど百年前に、その前の極めて悲惨な終末の状況において、まさに破局を迎えました。

ロシアも悲惨だったのです、帝政ロシアの時代。結局それがロシア革命ということで破局を迎えました。それから第1次世界大戦の後のアメリカの経済ブーム。これも1929年の大暴落によって破局を迎えました。あるいはそれから日本軍の戦争も最後、原爆が落ちるという大変な悲惨なことを経験して、破局を迎えました。やはり無理に無理を重ねていると、最後に破局は必ず来ているではないですか。これらはまだ政治的な破局、あるいは人間社会における破局かも知れませんけれども。今のことを考えていると、例えば放射能の問題、原発の運転を続けていく問題というのは、とんでもない破局に至ることがあり得るわけです。食料が足りないとか資源が足りないというのも、これは必ずどこかで破局をもたらすわけです。

９、破局の予感がもたらすストレス

実際に今、世界の難民はものすごい数に上っています。すなわち、まともに住めない、まともに生きることができない人たちが世界中を今、本当にどんどんさまよい歩いている時代です。これはまさに破局の前兆だと言ってまったく疑いないと思うのです。ですから、われわれは非常に冷静にならなければならない。今のわれわれも20世紀前半と同じか、ある意味ではそれ以上に破局に向って道を歩んでいる。ですから今われわれが抱えているさまざまな政治的な矛盾、財政赤字のこと、ものすごい失業者のこと、あるいは未来が見えないこと、企業の不安定さ、カントリーリスクの高まり、原発の危険、こういうことのすべてが、やはりみんなが無意識のうちにも認識している破局の接近を意味していて、無意識のうちにも人々が感じる破局到来の予感がさまざまなストレスとなって世の中を覆っている、今の世の中はそういう状態ではないかと思うのです。

そして、それに何か未熟なかたちで対処しようとして、たとえばお金を増発するとか、軍備を増強するとか、遺伝子組み換えとか姑息な方法を使っても結局物事はうまくいかなくて、かえって混乱が広がってくる、そういうものだと思うのです。症状と病気ということで言うならば、今のわれわれもやはりこれだけ乱れに乱れた世の中、人々が感じている不幸せあるいはその不満。その具体的な症状の裏側にある大きな病気。この病気が実はもうすぐ破局を迎えようとしていて、ただ単に今不満であるとか、大変であるとかいうだけでは済まなくて、この病気がついに国にしろ地球にしろ、すべてに破局をもたらすのではないかという、その予感と恐怖をみんな感じ始めている。今われわれが住んでいる社会というのは、そういうものではないかと思うのです。そうするとやはり政治において未来を創るということの非常に重要なポイントは、どんな場合であっても破局を回避するということではないかと思うのです。

ある意味で危機感がないときというのは、みんな毎日、それぞれ自由に伸び伸びと行動していて、未来をあまり感じなくてもよいのです。非常に好景気で何事もうまくいってい

るように見えるときというのは、今が一番よいですから。これよりもっと素晴しい未来を創ろうと言われても、「さぁ、なー」という感じです。例えば日本で振り返ってみれば 1980 年代の末ぐらいは大変な好景気です。その頃みんなが言っていたのは、確かに今は好景気である。しかしもっと生活の質をよくしよう、あるいは世界にもっとわれわれの良さを広めていこう、もっとレジャーができるようにしよう、というようなことでした。それは別に悪いことはないのですが、しかし人々の実感から言うとこれだけ幸せなのだし、確かにそれ以上の幸せもあるのだけども、しかし今が一番よいかなと。

そこにはやはり、今日の貧困からどうやって逃れればよいかと思っている人々とは、だいぶ違う世界があったと思います。よく言われるのですが、本当に貧しいと早く死にたいと思う。私の父母から祖父母の本当に貧しい世代はそうです。あまりにも貧しいと、決して長生きしたいとは思わない。でも豊かになってくると、できるだけ長生きしたいと思うようになるのです。人間とはまった現金なものだと思いますが、この数十年の間に日本のなかに大きな変化があったと思うのです。ですから人々が本当に豊かを実感すると、ごく自然に政治のリーダーシップが必要とする未来というもののイメージが消えてきて、実際にはそれが持続不可能なものであっても多くの人たちは気がつかない、政治のリーダーも気がつかない。あるいは気がつこうとしない。

だから政治も人々を破局から救うために、行き過ぎから戻ってくるということをさせることをしなくなる。だから実際には無理がどんどん重なっていって、それが株価や不動産価格の暴落を生み、産業の空洞化を生み、失業を生み、社会のびん乱を生みと、最終的な破局に向けてさまざまな症状が引き起こされていくわけです。そして今やその症状があまりにもひどくなってきて、原発まで爆発して、ますます多くの人たちがこれはもう避けがたく破局に向かっているのではないだろうかと、みんな本気で感じ、心配し始めているわけです。それがまさに今という時代なのではないでしょうか。

１０、破局に向かう状況は世界も同じ

中国にしろ、ロシアにしろ、インドにしろ、新興国はどうなのでしょうか。私は全部今まで日本で起きたことが、時間差をおいて起きつつあるのではないかと見ているのです。この 3 つの国も、もうとにかく極端な貧困をなんとかしたいというところがスタートです。そこから近代化ということが始まって、それがこの 20 年ぐらい猛烈な勢いで進んできたわけです。

当然それに対するひずみも生まれました。でもその近代化のひずみが問題なのではなくて、この近代化した社会そのものが実は持続不可能だ、破局を回避できない状況にあるということに、そろそろみんな気がつき始めてきたのではないかと思うのです。ビルを造りました、車も走らせるようにしました、人々もビジネス大学院で教育しました。しかしそうやって運営する社会そのものが、実はこのままでは持続不可能だ、破局を回避できないということに、みんな本気で気づき始めたと思うのです。今までは矛盾が現れているのは

近代化に立ち遅れた部分の人たちだと思っていた。極端に貧しい地域の人たちだとか、政治的に問題がある人たちだとか、あるいは何か近代化に不満を持っている人たち。そういう人たちは近代化に立ち遅れているが、しかし時間の問題だ。やがて彼らも時が来れば同じように近代化の恩恵を被るようになる。大抵の人は今までそう思っていたと思います。ところが、どうも状況が変だ。今まで成功したと思っていた人たち、成功への階段を順調に登っていたはずの人たちが実に惨めな状況になり始めている。最初は単に運が悪いだけだと思っていた。ところが次第にそういう人が増えてくる。そして気が付いたら世の中の９９％の人は世の中の矛盾に呻吟しなければならない立場に立たされている、これは一体どういうことだ、とんでもない世の中ではないか。そういうことに多くの人々が気付き始めているのです。

株価が暴落したり、工場が閉鎖されたり、戦争に駆り出されたり、今までの成功を吹き飛ばすような問題があちこちに、まさに自分と自分の周囲 3 メートル以内に噴き出す。それまで自分は成功者だと思っていた人が、何かいつの間にか声が出なくなった、あるいは肩で息をしながらのどから声を絞り出すように「俺はうまくいっている」と言っている。なんか、強がりを言うようになっている。この状況というのは、実はすべての人たちを不幸にしつつある、タイタニック号の沈没みたいなことが実際に社会で起き始めているということではないかと、そろそろ多くの人たちが気づき始めてきたと思うのです。今まさにわれわれは持続不可能な世の中、破局を避けられない世の中に住んでいるのだということを、本当にみんな感じるようになってきたと思うのです。

１１、破局を免れる社会を創ることが政治の最大の課題

政治の原理原則から言うならば、とにかくこの危機を突破することが一番重要なことだと思うのです。さまざまな人が世の中にはいる。だから、症状がさらに合併症を生んで、その合併症がさらに合併症を生んでしまって、とてつもなく混乱して複雑で、どこから手を付けてよいか分からないようなびん乱状態、腐乱状態が社会に広がっていることだけは間違いないと思います。でも、これを全部対症療法で治そうとしても、さっき言ったように、マネジメント・バイ・ウオーキング・アラウンドで政治が微調整で治そうとしても、これは不可能だと思います。沈みゆくタイタニック号の船の上でいくらあっちに逃げましょう、こっちに逃げましょう、ここに座って居て下さい、立って走って下さいと言っても、それは全体の沈没を止めることにはまったくならないと思うのです。答えはそこにはないと思うのです。やはり一番大切なことは、世の中を破局から回避させることです。タイタニック号が沈んでいくのなら、その底に板でも棒でも当てて、沈没を止めることです。あるいはその沈没している人を全員救い出すことです。そして、二度と沈まない新しい大地の上に、人々の安住の地を創ることです。

これが一番重要な政治の課題だと私は思うのです。この一番重要な課題というのは、私は絶対避けることができないものであって。逆に今の社会のびん乱、混乱を止める唯一の

方法は、あるいはこの社会を救う唯一の方法は、まさに今の破局しか有り得ない。言い換えれば持続不可能なということですけども、破局を避けられない社会を、破局を免れる社会、持続可能な社会に創り変えていくということ。これがほとんど唯一、政治が機能しうる場所ではないかと、私は思うのです。みんなが合意して、みんなが勢いを持って行動していくことができる一つの方向性をどこに見出せばよいか。それを今この状況で考えるならば、そしてそれは日本だけではなくて、もちろんアメリカ、ヨーロッパの先進国もそうですし、あるいは新興国もそうですし、あるいはまだそこまでいかないほとんど貧困と戦乱でどうにもならない世の中も全部そうですが、それは文字どおり、持続可能な社会を政治のリーダーシップで創造すること、その一言に尽きてしまうのではないかと私は思うのです。

すなわち既に破局してしまったところもそうなのですけれども、これはどうやら破局を避けられる、ここで安定した世の中を生きていくことができる、そういう感覚を人々が持てる社会を創るということ。まさに持続可能な社会をつくるということ。それを理念だけではなくて、具体的な戦略を持って一人ひとりと、その一人ひとりが半径 3 メートル以内に、その破局を回避できる社会が来たと実感できるところまですべてを動かしていく。そのチームワークをつくって運営していくこと。これがほとんど唯一、今、人々にとって受け入れられ、そして実際に機能する政治というものだと私は思うのです。

１２、政治と国民の幸せの関係

基本的に政治というのは人々に幸せそのものを届けることではないと思うのです。お母さんが赤ん坊の口に食事を持っていくことではないと思うのです。そうではなくて政治というのは、人々が成功する舞台を作るということだと思うのです。右翼も左翼も、お金のある人もない人も、勤勉な人もそうでない人も、みんな舞台の上に乗って、切ったり切られたり、誉めたりけなしたり、肩を叩き合ったり泣いたり、とにかくそうやって結果的にみんなで舞台の上で未来の創造をやっていくことができる、その舞台を創って、舞台がひっくり返らないように上手に舞台の運営をすること、それが政治というものではないのでしょうか。政治と国民が何かを与える人と何かをもらう人という関係では、これは政治にならないと思うのです。それは支配と従属の関係を意味するのです。その支配と従属がお金によるものなのか、武器によるものなのか、あるいはもっと巧妙な手段によるものなのか、その手段ややり方はいろいろあると思うのですけれども。誰かが格別な権力や金や資源を持っていて、これを人々に分け与えるというのは、これは支配と従属の関係です。これそのものは、私は政治だとは思わないのです。そうではなくて政治というのは、あくまでも人々に自分で成功を達成し、成功を実感してもらうというところに、本当のだいご味があるのではないかと思うのです。結局のところ支配と従属の関係というのは、それが政治だと言ってもそれは結局パンとサーカスに行き着いてしまうわけです。ですからそのパンがなくなれば、面白いサーカスがなくなったら、ある日突然ヒューズが全部飛んでしま

ったように、何もなくなってしまうのです。

それこそまさに破局回避ができない道、破局への道なのです。ありもしない金をあるかのごとく刷ってまいてみたり、人々を幸せにする能力がないのに能力があるかのごときふりをして人々に権力を売ってみたり。これすべて私は、破局を避けられないやり方というものだと思うのです。そうではなくて、あくまでも政治というのは舞台、戦略を整える場所なのです。ですからその戦略の場所で、そして思想の統制をすることなく、みんながそこである一つの社会の動きに従って行動している。そうするとチャンスが見えてくる。そのチャンスは一人ひとりが見えて手にできるチャンスです。何か行動すると結果として、「ああ、なんか自分もこれは成功したではないか、よかったではないか」、こう思えるということです。

例えばあるところに農家の人たちがいる。なかなか厳しい暮らしをして生きている。しかし何かそこに、面白い作物を作ってみたらどうだという話があった。その作物を作ってみた。それが売れた。そうすると「あぁ、なんか今まで米だけ作っていたのが、なんかこの作物を作ったら自分にぜんぜん違う新しい未来が見えてきたよ」、という言葉が出てくる。それはその人とその人の周り 3 メートル以内に変化が来たということです。あるいは農家をやっていて、昔の農家ですから現金収入がない。それが近くに工場ができた。工場に行ってみたら現金収入を得られた。その現金で子どもを学校にやることができた、高等教育を受けさせることができた。これは今ではちょっとその感覚が違うと思いますけども、当時の人たちにとってみれば、なにか気が付いたら自分の回りに変化が出てきたということだと思うのです。あるいは家でずっと昔のように暮らしていたら、ある日電話が通じた。それで都会に就職した子供と直接話ができるようになった。さらにインターネットが始まったときもそうです。インターネットというものができた。別に国際化だとかグローバリゼーションだとか、そういう言葉ではなくて、実際にインターネットのコードがつながった。そしてホームページを開いてれば、いろいろな情報がそこには載っている。インターネットで試しに買いものをしてみた。そうしたら実際に、買ったものが自分の家に宅急便で届いた。こういう具体的な変化というものが自分と自分の周り 3 メートル以内に起きてきたときに、具体的な行動によって具体的な変化が自分と自分の周り 3 メートル以内に起きたときに、人々は自分にも何か文明の光というか、変化の風というか、新しい時代がやってきたということを実感するわけです。

非常に大変な状況の中でどうしようとみんなが寄り集まって、1+1 を 3 にするように何か新しい取り組みをやってみた。その結果として新しい鉄道が生まれたとか、新しい町が生まれたとか、新しい組織が生まれたとか。これらは全部、政治が設定した大きな舞台の上で知らず知らずのうちにみんなが動いていって、そしてそこで具体的な行動を取るチャンスが生まれて、実際にチャンスを生かして人々は行動してみて、自分で成功を手にする、そういうものなのです。政治というのは成功の最後の成果、すなわちお金とか名誉というものを権力によって与えても、それはうわべのもので、あまり長続きするものではないと

思うのです。それは政治ではない。そうではなくて、人々が自分の力で進化進歩成長を手にすることができるための舞台を整え、それを運営すること。これが私は政治の仕事だと思うのです。

１３、一人一人が成功に貢献することの偉大さ

これは組織のリーダーシップでも同じです。組織のリーダーシップにおいてリーダーが心掛けるべき重要なポイントの一つは、すべての人が、自分がそこで活躍した分だけ組織の成功が高まったと実感できるように、注意深く物事をアレンジするということです。例え非正規社員の人でも、きょうたまたま来た、きょうだけしか来ない人であっても、社員の人であっても、アルバイトの人であっても、その人がきょうここで働いたその分だけ組織全体の成功が高まったのだと思えるように注意深く物事を設計し、そして行動しろというアドバイスがあります。これは極めて重要なことで、政治はまさにそうなのです。右翼は右翼なりに、左翼は左翼なりに、お金を持った人は持った人なりに、持ってない人は持ってない人なりに、すねたやつはすねたやつなりに、まじめなやつはまじめなやつなりに。それぞれにみんな何か生活の中で、未来が明るくなるような変化というものを自分なりの努力で手にして、「あぁ、なんかこれで自分も成功に向って１歩進んだな。そしてさらに社会全体も良き方向に動いたな」と。その具体的な自分の幸せ、そして社会が良くなったという実感が、自分および自分の周り 3 メートル以内に具体的事象として発生すること。そこまで持っていけるような戦略、道具立て、舞台を作り運営するということ。私はこれが政治のリーダーシップの重要なポイントだと思うのです。ですからわれわれは、やはりここで持続可能性を高めるという以上に、破局をしないための生き方を整える。そして国民一人一人がそれに参加できるような場所を、極めて注意深く設計し設定し、そしてそれを運営することによって、政治だけではなくて経済も含めてあらゆるものが、教育もすべて良き方向に向っていく、その結果として政治に対する信認が、国の求心力が一人一人の国民に腹の底から湧いてくる。政治というのはそういう大きな発想と行動力を持つことが極めて大事だと思うのです。

要するに今の時代はみんな時間を考えませんから、どうしても発想が今にとどまってしまいます。そうではなくて、未来をもう一回創り直すのだと。今のこの状況は破局に向っているのだから、この破局を回避するためにみんなで未来を創るのだという発想をみんなが持たなければいけない。それはまず政治のリーダーがしっかり認識しなければいけない。そして問題というものは基本的に今の権力闘争ではなくて、未来に向って解決すべきものだということを明確に肝に銘じなければならない。そこでもう一つ言うならば、問題を未来に解決するときに、非常に重要な考え方が進化するということなのです。これは時間と並んで、問題を解決するときの一番基本的な方法論なのです。それは進化なのです。

１４、進化が問題を解決する

進化というのは弁証法的な問題の解決と言ってもよいのかも知れませんが、賛成か反対かを超えて、根源的なところで両方良くなるやり方ということです。ここで水と油の話をしたいと思います。水と油はまさに水と油、ぜんぜん違います。火を消すということを考えるときに、火を消すことに対して水は味方で油は敵です。火を消すのは水で油を注げば火は燃えさかります。ですから火を消すという目標に対して、水は味方で油は敵。これ、こういうものだと決め付けてしまったら、それは間違いなのです。例えば水があっても、その水が火から遠ければ火は消えないのです。水が届きませんから。しかし油を車のガソリンタンクに入れ、水を車の荷台に積み、油を車のエンジンで燃やして水を火元まで運んで、そして水を掛ければ火は消えるのです。

すなわち、水と油が協力すると火は消えるのです。ですから油も火を消す味方になるのです。むしろ火元が水のある場所から遠ければ、油の力がなければ水だけでは火は消えないのです。油が助けてくれるから水も火を消すことができるというかたちになります。これがまさに進化です。こうやって敵と味方とか、いろいろ考え方が違うとか、立場が違うとか、特徴が違う、やり方が違うというのは、これはもっともっと進化させろという意味なのです。違いがあるから放っておくとか差別するのではなくて、違いを超えて良さを生かすようなものいかに創るか。１＋１を 3 にするようなものをいかに創るか、進化させるか、このポイントをいつも考えているということが誰にとっても実は非常に重要なことなのです。もちろん技術者であれば消防自動車のようなものを作って水と油が協力して火を消すというようなことは普段の仕事の中でいろいろやるかもしれません。しかし政治や経済などの社会科学の分野においても、これはいつも重要なことなのです。

例えば戦後の日本で社会民主主義というのがありました。労使協調というものです。労働者と経営者というのは水と油のように敵対する関係である、というのが普通の考え方です。しかし双方がそれぞれ本来の使命をよく守りながら協力すると何が起きるか。実はすばらしい経営が始まるのです。労働者は労働者らしく、経営者は経営者らしく、まさに水と油を混ぜるのではなく、水は水タンクに、油はガソリンタンクに入れて共同して消防自動車を運用すると消えない火が消える。それが労使協調の本当のだいご味というものなのです。すなわち経営者は既存の製品が陳腐化しないように常に新しい製品の開発や量産体制の構築に努力し、労働者は自分たちの最大の武器である熟練が衰えないように、また新しい製品や新しい製造方法の登場によってそれが陳腐化しないように自ら新しい目標に挑戦する。経営者と労働者がお互いに切磋琢磨し、お互いの役割と強みを生かしながら良い会社を作ろうということで会社を運営したのが労使協調、社会民主主義の基本的な姿だと思うのです。だから下からの工夫というものが生まれ、やはりそれは戦後のある一時期において、非常に多くの良き効果をもたらし、日本の製造業を世界一の座に押し上げたと私は思うのです。これも進化による繁栄だったと思うのです。

１５、縦割り思想こそ進化を妨げる悪弊

ということはこういう進化というものを考えたときに、それを一番邪魔するものこそ、縦割りの発想です。自分の専門に閉じこもるということは、すなわち進化を自ら拒否しているということなのです。

進化というのは水と油で作るようなものですから、ぜんぜん違うもの、まったくの異分野、まったく異質なものと一緒になって初めてできるものです。しかし今の日本はどうでしょうか、官から民から学からあらゆるところが縦割りで自分のタコつぼに立てこもっています。これが間違いの元なのです。少なくともここで政治は進化を促すために人々がタコつぼに閉じこもらない、タコつぼから出てくるように積極的に働き掛けをしなければいけません。専門は 1 つあるとしてもいろいろな分野の専門家と話をして、胸襟を開いて、共に何かできるか、水と油が一緒になって火を消せないか、こういうことをどんどん考えて行動する。これが社会全体の進化の原動力なのです。人々を具体的に幸せにする、今まで見たことも聞いたこともないものを世の中につくる、そしてその結果として今まで解決不可能だった問題が解決する、その原動力こそが進化なのです。

ですから今回の原発事故もそうですが、専門家がそれぞれの専門分野に立てこもる。原子力物理学者が自分たちで作り上げた既存の常識と利権のなかに立てこもる、これそのものが崩壊、滅びの方程式です。やはりいろいろな人たちと、まさに「水と油を組み合わせて火を消すための車をつくりましょう」みたいなことをやっていかなければ、今ある問題を根本的に解決するということは非常に難しくなると思うのです。ですからここで政治が次に何をしなければいけないかと言えば、ある戦略を作ったのならば、進化を促すためのチームを創らなければならないということです。異なる分野の専門家が 1+1 が 3 になるような進化を達成できるチームを創る。昔 NHK で放映していたプロジェクト X のような話です。いろいろな分野の専門家、普通の人が集って偉大な成功をした。いろいろな分野の専門家が進化を目的に集ることによって、今まで見たことも聞いたこともないようなものが生まれた。こういう事例をあちらこちらにたくさん創らせ始めるということ。これが政治の非常に重要な役割です。それがまさに政治が世の中の進化を促すということの具体的な姿です。ですから、もちろんそれに金融が必要であれば、金融の仕組みをつくらなければなりません。新しい投資銀行です。あるいは科学者の貢献が必要であれば、科学者の貢献も促さなければなりません。あるいは法律や規則を見直して、縛るものは縛り、緩める必要があるならば緩めればよいのです。これは全部政治の仕事なのです。政治は常に世の中を進化させるための舞台づくりとその運営に粉骨砕身しなければなりません。なぜならば世の中の進化によって初めて、今日、どぶ板を回るだけの微調整では解決できない根本的な問題の解決ができ、それによって初めて、政治が約束する未来の創造ということが本格的に実現できるからです。

１６、国民がみんな乗ることができる舞台とは

ここで話が戻るようですが、先ほど述べたように、破局を回避するためにみんなが活躍

する場所を創る。一体それはどう創るかということです。

実は、私はその具体的な戦略というものはあまり難しいことではなくて、同時にあまりたくさんあるものでもなくて、ひと言で言ってしまえば新しい都市と農林漁村を創ることだというように考えています。新しい都市と農林漁村を創ること、それは言ってみれば新しい衣食住の場を創ることです。新しい衣食住の場を創ること、言い切ってしまえばただそれだけのことだと思うのです。「え、なんのこと？」と皆さん驚かれるかもしれませんが、よく世の中を見て下さい。世の中に住んでいる人、仕事をしている人、そのほとんどは自分の今住んでいる都市や農林漁村の中とその周辺でほとんどの時間を過ごしていませんか。生活にしろ仕事にしろ、ほとんどは今自分が住んでいる都市と農林漁村の中とその周辺で完結しています。確かに今の時代、新幹線や飛行機に乗ってあっちこっち行く人は多いですけども、大多数の人はほとんどの時間を自分が住んでいる都市と農林漁村の中とその周辺で過ごしています。世の中にはさまざまなライフスタイルがあり、さまざま仕事がある。しかしその生活や仕事の現場はそう広いところに分散しているわけではなく、簡単に言えば自分の町や村で生きているわけです。この中でみんな生活をし、仕事をして一生を送っているわけです。世の中にはさまざまな仕事がありますが、その仕事のほとんどはこの町や村の中で通用する仕事です。生活というものも「あんな生活がいいな、こんな生活いいな」と思っていても、現実は今のこの町や村の中の生活です。ですから私はみんなが、右翼も左翼もお年寄りも若い人も、お金を持っている人も持っていない人もすべての人たちが参加できて、みんなが成功を達成できる一番基本的な戦略というのは都市や農林漁村を進化させること。現代の衣食住を具体的に全部変えていくということだと思うのです。

ですから昔はよく遷都をしました、日本も外国も。王朝が変わると新しい町を創る。これも同じことだと思います。遷都も突き詰めてみれば新しい衣食住を創るということです。新しい思想や理念を下敷きにしながら、新しい変化を具体的にそこに住んでいる人たち全員に起させていく、それ遷都です。

あるいは東京の改造も同じです。明治の文明開化、関東大震災後の帝都復興、戦後の復興と再開発。さらに城下町。戦国大名たちが新しい町を造営して、そこに諸国の人々を呼び集めてくる。これもまさに戦国大名たちが自分の国を発展させるために戦略的に行ったことで、そこに新しい衣食住が生まれ、さまざまな仕事が生まれ、新しい生活が始まるわけです。そしてこうやって都市を創りなおせば、都市は農林漁村のサポートによって成り立っていますから、農林漁村にも新しい変化が生まれてくる。消費地を支えるための生産体制とか、新しいエネルギーや工業原料の生産とか、治山治水とか。ですから本来、都市と農林漁村はセットになっていて、都市が持続的に繁栄するためには農林漁村も持続的に発展させないとならない。だから国の発展のためには両方の進化と整備を同時に進めていかなければならないのです。結局戦後の日本を考えると、本来農林漁村が担うべき第１次産業の多くを輸入に依存し、そのために都市は繁栄したけれども農林漁村は衰退するというアンバランスな格好になってしまいました。さらに近年は都市から第２次産業も撤退し

てしまうと、これが農林漁村ではなくて外国に行ってしまい、第２次産業の製品の多くも輸入に依存するようになって、ふと気がつけば日本には根なし草的な大消費地、都市だけが残されたという格好なのです。これでは多くの国民に未来を創るための活躍の場所を与えることができないのは自明です。

ですから先述のようなみんなが成功できる、未来に向けて成功を実感できる場所をつくるというのは、突き詰めれば新しい町や新しい村、新しい都市や新しい農林漁村を作るということなのです。農林漁村という言葉に鉱山業を含めた資源とエネルギーの生産を加えれば、これを第１次産業の場所と言い変えても良いと思います。ですから第２次、第３次産業の場所を都市と言うならば、新しい第１次産業の場所というものを国内にきちんと整備して、１次、２次、３次、すべての産業が調和を保って進化していくということ。都市と農林漁村、２次、３次産業の場所と１次産業の場所が共に発展進化していくということ、これが実は非常に現実的で歴史的に見ても一番効果の高い、戦略的な目標だと思うのです。最近火星に衛星が行って、火星の写真を撮っていますが、要するにあれやっている人たちは心の底で火星に町をつくりたいと思っているのでしょう。地球も随分住みづらくなってしまったので、火星に町をつくって住みたとどっかで思っているのだと思うのです。政治の基本、人々が未来を創る過程で成功を達成するための基礎的な部分、舞台をつくるということは、それが可能になるような新しい都市と農林漁村を創るということなのです。

したがってそれをもう少し踏み込んで言うならば、新しいライフスタイルを創るということになります。ライフスタイルは突き詰めれば衣食住ということになります。だから健康で持続可能なライフスタイルを実現する、ロハスな世の中にするという言葉は、単におしゃれな世の中を創るという意味ではなくて、根本的に現在の破局が免れない衣食住、都市と農林漁村を一新し、まったく新しい世の中を作ろうという、非常に建設的な言葉なのです。

１７、新しく都市と農林漁村を創り直すということ

まとめて言うならば、破局が起きないような新しいライフスタイル、新しい衣食住の体系を、新しい都市と農林漁村の建設とともに創っていこう。その過程で無数の仕事が生まれてくるから、多種多様な人たちに仕事が回ってくる。新しいライフスタイルの恩恵も被ることができる。そしてその過程で生まれてくるさまざまな製品、システム、強みといったものがその人、企業、地域、そして国の競争力となり、世界の中で確固とした役割を担うための基礎的な力になる、そういうことだと思うのです。まさに現在の危機をバネにして、これを乗り越えて次の世の中をつくるための政治の一番重要な原動力であり戦略、それはまったく新しい都市と農林漁村を創り直すことだと言い切ってしまって、私はよいと思うのです。健康で破局回避ができるような、今のこの問題山積の中で未来に向けて破局回避ができるような、新しい町や村を進化の力を借りながら政治のリーダーシップで創っていく。その具体的な行動に向けたチームワークとさまざまな段取りを基本に据えながら、

足元の小さな問題を微調整していく。これが今の政治が担うべき極めて重要な仕事だと私は思うのです。

１８、世界も事情は同じ

私は、こういう戦略というのは国を問わず、これからどこからでも出てくるだろうと思います。ここまで来れば日本だけでなく欧米、それから新興国も、あるいは開発途上国も単に時間差の問題であって、20 世紀までのわれわれが手にした文明が、実は持続不可能、破局を免れないものであることが日々鮮明になってくる。この破局の危機を乗り越えなければ未来はないという状況は全世界共通です。そして、この危機に真正面から取り組んで成功している国を私はまだ見たことがありません。もちろんブータンは初めから現代文明の根なし草的生活に乗らなかったわけですから、その分は未来に対して随分明るいものを持てると思うのです。しかし幸か不幸か 20 世紀までの文明に思いっきり浸ってしまったところというのは、これをどうしても軌道修正しなければなりません。そうでないと破局は避けられません。しかしこれについて、まだ世界中のどの国もこの危機を突破することができないままだと思います。

逆に日本も世界も最近は様々な分野で原始的な市場原理を導入してみたり、テロ戦争やさまざまな形態の武力紛争をやってみたりして、結局問題をこじらせて症状を悪くさせて、より多くの合併症を生み、かえって破局までの時間を縮めてしまっただけではないかと思うのです。ですからまず日本がここで本格的な問題解決をやらなければいけないと思うのです。

１９、政府が果たすべき役割は大きい

さらにここでまだいくつか考慮することがあると思うのです。その資源、エネルギー、食料の問題です。基本的に原子力発電は破局を避けられないものだと言ってよいと思います。国会事故調による福島原発事故調査報告書を読むとわかりますが、例えば今回の地震でも最大の揺れは制御棒が入ってから来ているわけです。したがって制御棒が入る前に巨大な揺れが来たら、制御棒が入らなくて格納容器そのものが爆発した可能性が多いにあります。ですから地震国日本でそのような危険なものを運転すること自体が破局を免れないことであり、やはり原子力発電は破局を免れないエネルギーだとはっきり認識するべきです。でも原発は運転を止めていたとしても、これは国会事故調の報告書が語るように、危険なのです。冷却ができなくなればいつでも爆発の危険があります。また使用済み核燃料の処分のめどは立っていませんし、飛び散った放射性物質の処理も単に場所を移動させるだけで、根本的にめどが立っていません。そして事故を起こした原子炉をどのように廃炉にもっていくかもまだ本当はめどが立っていないわけです。これらは実にやっかいな問題で、まさに進化をしなければ解決できない典型的な問題だと思います。もう電力会社でも保安院でも原子炉メーカーでも原子力物理学者でも、何もできないではないですか。何も

できないから開き直っているだけでしょう。日本の原子力問題の最終解決には従来の縦割りを排して原子力関係以外の人たち、異分野の人たちも呼んできてチームを創り、本物の進化によって問題を解決するかありません。そしてそのリーダーシップは国が取らなければなりません。

今までと違うもの、水と油で新しい消火のやり方を開発するみたいなことをやらなければ、原子力問題はまったく前に進まないわけです。この縦割りの壁を壊すということ、みんなが今まで閉じこもっていたタコつぼを壊すということが、まず政治がやるべき第一歩だと思います。財政も同じです。開き直って最後に増税しかないとか言って増税を無理やりやるとか、こういうことをしたらもっと世の中が乱れるに決まっているわけです。しかし財務省は最後まで自分たちで問題を抱え込み、自分たちのやり方で問題を解決しようとしています。教育もそうです。いじめの問題を含めて今の日本の教育はあまりにも多くの問題を抱えています。しかしけしからんと言ってこれを責めても、もうあれが限界なのではないでしょうか。現在の教育者の限界が見えているわけです。要するに財政も教育も、異分野の人たちを大規模に入れて、根本的に進化させなければ問題を解決するどころか、現状維持すらできない状態になっているわけです。

２０、産業、防災、教育、すべて立て直しである

輸出産業も同じでしょう。この円高で経営が維持できないと言っている。しかし大きな視野で考えれば、もうやはり 20 世紀の文明の利器を大量生産して外国に売るというのは、終わりが見えているわけです。それは新興国の仕事でしょう。そうするとわれわれは今持っている能力やエネルギーをぜんぜん別なもの、持続可能な社会の運営に必要な衣食住の建設に根本的に振り向かなければならないわけです。江戸時代が明治時代に変わって文明の利器が変わりました。文明のかたちが変わりました。文明のかたちが変われば作る製品が違ってきます。しかしその元にある技術、技能、あるいは情熱というものは次の時代に継承して生かすことができます。ですから今持っている技術、技能がなくならないうちに何をつくるか、どう行動するか、新しい戦略を持ってくることが大切で、まさにそれは持続可能性がある、すなわち破局を回避できる舞台をつくるために、政治が取り組まなければならない非常に重要な課題です。

そう考えれば今のようにこの世界不況と激しい円高ではやっていけないとか言って、人を切り、会社を切り売りしているなどということはまったく無駄な話であって、そんな問題で悩むのではなくて、もっと他の分野の人たちとよく交流して、仕事を進化させて、次のことをみんなでやってみたらよいのです。そして多くの中小零細企業を実質的に束ねる大企業が進化をしようとしないから、その傘下で仕事をしている中小零細企業にも進化のチャンスが訪れず、共倒れの様相を呈してきます。まったくもったいない話で、とにかく未来に向けて進化を促進させていかなければなりません。

さらに食料がそうです。ここのところ世界的に食料の値段が上がってきています。やは

り世界の気象の変化によって作物の取れ方が変わってきて、今までの穀物生産がうまくいかなくなっているわけです。食料こそまさに本当に重要なもので、日本は世界屈指の飽食の国ですからあまり実感がわかないかもしれませんが、食料の供給が絶たれるとか、食料の値段が上がると、もう真っ先に生き死にの問題になってきて、それが暴動を生み、戦争を生み、大混乱を生むのです。そしてその元によく水の問題があるのです。今回のアメリカの極端な干ばつも耕地に水がないから起きているわけです。今や水は世界中で取り合いになりつつありますが、その水というのも地下水をくみ上げてはだめなのです。最後に塩が出てきてしまうのです。やはり水、食料の問題の根源は、もう一回世界の砂漠を緑化し直すところから始めるしかないのです。世界の砂漠を緑化して、そして森を回復させ、川を回復させ、そして農業をきちんと復興させるということ。これをやらなければ永遠に食料の問題は消えません。しかも農業もまさに進化ですから、新しいさまざまな科学や新しい技術、そしてベテランにしかない技能が役に立つでしょうし、今まではまったくの異分野だった人たちが入ってきて。植林のことから農業や食料生産、その加工、流通、あらゆる分野をもっと良くしていけばよいのです。これもまさに持続可能で環境汚染や餓死を回避できる新しい農業を世界中に広げていこうということであり、もう地球上どこでも飢え死にするということを心配しないでみんなが生きていくために、みんなが協力していけばよいのです。そしてその舞台の設定と運営を政治がやっていけばよいのです。

それから防災も同じです。私が今非常に危惧するのは、財政がほとんど破たん状態になるなかで、治山治水に回す金がなくなってきているということです。そうすると壊れた堤防が直らないとか、ダムが老朽化で決壊しそうなのだけれど直せないということが起きてくる。そうすると財政が豊かなときに作った金をかけた防災設備というのは、金がない時期に更新を迫られると更新できなくて破たんするのです。持続可能な防災、破綻を回避できる防災ということを考えたときには、たとえ金がない時期に更新を迫られても、破たんしないようなものでなければ意味がないということになります。

そうなってくると必然的に、そもそもどこに住むかという、住む場所そのものの選択から考えなおすことが一番効果的な問題解決法です。縄文人は昔から高台に住んで、川の洪水が起きるようなところ、いきなり崖が崩れるようなところには住んでいません。やはり金をかけない、金がない時期に設備を更新できずに災害が広がるということがないような防災を考えるならば、住む場所そのものを変えるということが非常に重要です。それは津波のことを考えても同じです。やはり津波が来るところに家建てることはできませんので、町の場所を変えるということがすごく大事です。それはただ単に津波を避ける、山崩れを避ける、洪水を避けるという意味以上に、その方がやはり豊かになるのです。

そもそも災害の危険が非常に少ないところは、昔から落ち着いているところではないですか。やはり落ち着きとか安定というものが、長い時間の中で人の幸せをはぐくんでいくのです。ですから本当に今まではいろいろと試行錯誤の過程があって、試行錯誤の中でいろいろなところに町をつくり、いろいろな防災設備を作ってみましたが、それはそれその

ものがよい、悪いということではなくて、特にお金の問題、お金が行き詰まったときにでも破たんしないような防災ということを考えるならば、それはもう初めから住む場所を変えてしまうことが一番よいと思うのです。

さらに林業も同じです。日本は木の国と言いながら木は山に植えられていますから、山の木を切って出荷するには非常に金がかかります。むしろスギとかヒノキみたいな建築用材は平地に植えた方が絶対に楽ですから、平地にたくさんの木を植えたらよいと思うのです。そして山の方は崩れると困りますし、多様な生態系を維持する必要がありますから広葉樹を植えるとか。そういうことだってやればできることですから、政治が舞台を作って維持して、しっかり全国でやればよいと思うのです。

２１、　21 世紀の特産物を創ることの大切さ

そしてもう一歩踏み込んで経済ということで考えるならば、こうした日本を創るときに、世界の中の日本という視点で、日本の競争力をどう維持発展させるかという問題があります。それは今までのようにコストの安いところで作って、高く売れるところで売るという世界最適生産、最適販売ということでは立ち行かないわけですから、これからは世界の中での役割分担という発想になってくると思います。すなわち世界の中で各国、各地域がどのように役割分担するかということが、これから非常に重要な課題になってくると思います。今までは価格に基づく役割分担でした。安い国と高い国。高い国は買う方に回って、安い国が作る方に回る。こういうように世界は運営してきましたが、世界中どこでも急速に物価が上がってきて、新興国も先進国と値段があまり変わらないようになってきた。そのために新興国の優位性が急速に失われ、新興国の未来への確信が揺らぎ始めている。まさに破局を回避できない経済システムの危機が現実に訪れているわけですが、その中であらためて、ここまで 20 世紀の文明の利器が広がり、それが行き詰った現状を踏まえて、世界の役割分担をどうするか、われわれは考えなければならないのです。

国内を考えても西に行けば大陸の影響も強い。日本海側に行けば日本海の向こう側の影響も強い。地域ごとに産業も考え方も重点の置き方が違ってくる。日本国内においても、自分たちの強みをどこに見いだすか、自分ところの特産物をどうするかということを考えなければいけない。まさに 21 世紀の特産物をどう創り、育て、売っていくか、それが 21 世紀の日本と地域の経済政策の根幹だと思うのです。そして地域や国を支える特産物を創造、維持、進化、発展させていくための舞台づくりと舞台の維持が政治の重要な仕事になってくるのです。同じように持続可能で破局が回避できる町や村を創るとしても、そこで最終的に何を売りものとし、それをどのように国内外に売ってお金を外から持ってくるか。町や村に住む人がほとんどで、たいていの人は町や村とその周辺で生きている。しかし、誰かはビジネスマンというかたちで町や村の外に飛び出していって交易をし、外で仕事をし、物やサービスのやり取りをし、それによって日本も世界も統合された地球全体のチームワークができて、それで地球全体が栄えていく。今のようにコストの高い低いによるグ

ローバリゼーションではなくて、世界のそれぞれの地域の個性を発揮させた役割分担と全体の統合によって世界が成り立っている、そういう構造にこれから我々は内外の経済を創り変えていく必要があります。

まず基本は町や村の生活。これはどの国でもそうです。これを壊してはいけません。町や村を壊して多くの人たちを流民、すなわちあてどなく漂流する人にしてしまうことそのものが破局の入り口であり、流民が発生するようなシステムそのものが破綻を招くシステムなのです。基本的には町や村が連綿と歴史を刻んでいて、その上に特産物というかたちで、あるいはその町や村の人たちの特技というかたちで、よその地域や外国に打って出ることができる、競争力のある何かが育っていくわけです。これをどう育てるかが非常に重要な政治の戦略であり、何が得意で何が不得意か、何が個性かということを冷静に見極めるということ、これも政治の非常に重要な仕事なのです。とにかく戦争なんかやっていたら、それどころではありません。バブルの崩壊による暴動も同じで、そうした大混乱の真最中では「そんなあさっての話はできない」という話になってきますから。やはりここはまず日本が国内で突破口を開くしかありません。あらためて日本の各地域、都市と農林漁村が進化しなければなりません。各分野の実力者、意欲のある人、いわゆる専門家が、それぞれこれから自分の力を発揮できる都市との農林漁村を選ぶ。そして都市と農林漁村も自分たちと一緒に未来を創ってくれる専門家を選ぶ。地域を支える人と、専門能力を持った人、それが縦糸と横糸のように織りなしていったときに初めて日本は再生し、新しい日本が始まっていくのです。

２２、政治は政治家だけの仕事ではない

ですから、そういう町や村の範囲を超えて活動する人たちのチームを作るのも政治の非常に重要な仕事です。そして教育も国防も、全部持続可能な社会を支えるものとして、もう一回生まれてくるはずなのです。このように政治というのは基本的戦略をつくって、人のチームをつくり、見極めをし、進化を促し、みんなに具体的な成功を実感してもらう。ここまでチームをつくって運営すること、これが政治の基本だと思います。

私は NPO 法人日本再生プログラム推進フォーラムで、前からこういうときになったら「みんなで集まろうよ」という話をしているのです。ここまで行き詰まっていくと新しい政治を政治家に任せられませんので、われわれみんなで実質的な政治をやるしかありません。政治は政治家だけの仕事ではないのです。何度も言うように、政治というのは未来を創る、国民が活躍する舞台を創ることです。政治は人々に金をまくことではありません。舞台を創って進化を促すさまざまなチームを創り、進化を具体的に達成させていくこと、これは別に政治家にしかできないことではなくて、現在の日本の政治情勢を見るならば、意欲と見識のある民間人がやらなければ他にやる人がいないことだと思うのです。これはひとつの分野の人たちだけが集まるだけでは決してできないこと、ある地域の人たち、ある思想の人たちだけが集っても絶対にできないことなのです。

最初の話に戻りますが、政治というのは右翼から左翼まで、お金を持っている人から持ってない人まで、若い人からお年寄りまで、いろいろな人たちが集って初めて成り立つものです。各分野の多種多様な人たちが共通の未来というものに向けて合意できなければ、本格的な政治にはならないのです。それも現実的には 1 つの未来像に完全に今すぐ全員が合意できるというようなことは普通ないわけです。ああ言えばこういう。あらゆる提案には反対意見があり、そこには好き嫌いの感情があり、思考停止も無関心もある。しかしそれでも何かやっていってまず小さな成功が達成されると、空気が変わってくるのです。みんなあまり反対を言わなくなる。そして少しづつ自分も何かやってみようという人が出てくる。そうやってある程度の時間をかけて、全体を動かしていくのです。

ですから先述のように政治というのは結果で評価されるべきものであり、やがて人々がそれぞれにどのように幸せになるかということをイメージしながら、具体的に誰かが先進的に行動を進めていく。意欲のある人が先頭切って行動していく。そうするとそっぽを向いていた人たちも時間と共に参加するようになる。そういう日が来ることを待ちながら行動していく、これが政治だと私は思うのです。それを担うことのできる人たちは、もうすでに今の日本に私はたくさんいると思うのです。

したがって私はタイミングが来たらそういう日本再生の先駆者になってくれそうな人たちにいったん集ってもらって、ここに述べた基本的な政治の構図というものを理解していただき、あらゆる分野で進化を加速するためのチーム、戦略を考えるチームを創り、これを早急にスタートさせることが必要があると思うのです。まず原発の処理のこと、輸出産業のこと、金融のこと、資源・エネルギー・食料のこと、教育のこと等々。これら全部、その分野のいろいろな意味の専門家が、あるいはその分野に関して能力や知識を持っている人たち。あるいはそういうものに対していろいろな思いを持っている普通の人たち。反対する人たちもいいのです。反対する人たちも賛成する人たちも全部含めてみんながそれぞれにああしよう、こうしようというものをアメーバー的に自分たちで手を伸して、人を見つけて話をし、行動し、小さな秩序を作ったり壊したりしたりしながら、やがて何か大きな秩序に持っていく。

このプロセスを大至急開始させなければいけないと思うのです。これが私は具体的に日本の政治の立て直しであり、日本の再生が本格的に始まった瞬間だということだと思うのです。そこで出てきたものの中で、例えば法律はこう直した方がよいとか、これはこのように仕組みをつくった方がよいとか、そうなったら職業政治家の出番だと思うのです。どうすればいいかという話が出てくれば今度は職業政治家がそれに従って、職業政治でできることをやることはできるし。微調整もやっていただく。国民間の微調整は職業政治家の仕事です。こうやって最終的には職業政治家まで含んだチームをとにかく確立させて具体的に行動を開始するということ、それが私は日本の再建の重要なポイントではないかと思うのです。

ここまで総論としての大方針を述べてきたわけですが、みんなで良き日本を再生しよう

ということで、これからいろいろ考えていきたいと思います。どうぞみなさんもご自身の回りに良き影響力を広げて、日本が進化できるための人をどんどん集めていただきたいと思っています。そしてわれわれのNPOではここに述べた大方針のもとでの戦略ということを前からいろいろ研究しています。具体的にはわれわれの NPO のホームページ（http://nipponsaisei.jp）を見ていただくと、具体的な町や村、産業の在り方についていろいろ詳しく出ていると思います。あるいは新しい都市再生の技術とか、スピンアウトのこととか、中小零細企業の立て直しのこととか、戦略的に政治が取り組まなければならない課題についていろいろと考えています。

こういうことをわれわれのNPOではずっと研究していますから、よろしければその辺も見て参考にしていただきたいと思います。とにかくここでみんながヨコに手をつないで、良きチームを創って、日本の再生を具体的に進めてまいりましょう。

（第2章　政治と民衆の関係）

１、民衆と職業政治家はコンデンサーの関係にある

では次にこうやって、人々、民衆が参加して政治を動かす場合の、民衆と職業政治家の関係はどうなるのでしょうか。もしここで民衆がお金を出して政治家を動かすと、これは腐敗政治になっていってしまいます。村のドンがいる、業界の実力者がいる、この人がお金の関係で政治家とつながって、自分の思ったとおり政治を動かすとなると、これは確かに未来を創るということについては、いきなり道路ができたり橋ができたり、それは非常に効果的なことなのかも知れませんけが、半面腐敗を生んでいくわけです。ですからやはりお金で民衆と政治家がつながるというのは、私はあまり良くないと思うのです。松下幸之助さんの政経塾もそうですが、誰かが有力スポンサーとしてお金を出してしまうと、やはりそこには知らず知らずにの間にある種の片寄りというものが出てきてしまうのではないかと思うのです。

私は民衆と職業政治家の関係というのはコンデンサーみたいなものだと前から思っているのです。コンデンサーをご存じでしょうか。電子部品でいろいろな機械に入っているのですが、2つの電極板があって、これはつながってないのです。2つの電極板が距離を離して向き合っていて、その間に空気が入っていたり油が入っていたりするのですがこれは絶縁体で、とにかく 2 つの電極板はつながっていないのです。一般的には交流の電流を流すのですが、一方の電極板に電圧をかけても電極板がつながっていないから電流は流れないように思います。しかし電流は流れるのです。なぜかというと片方の電極板の電圧が上がっていくと、距離をおいたもう片方の電極板に電気が発生するのです。ですから電極板を挟んで実質的には電流が流れるのです。接触はしないのに電流は流れる、

私はこれが民衆と職業政治家の間の一番健康な関係だと思うのです。別に金でつながっているわけでもないし、誰かを雇っているわけでもない。しかし民衆が持っているエネルギーが、距離を置いた政治家側の電極板に電気を起こし、あるいは政治家のエネルギーが

距離を置いた民衆側の電極板に電気を起こし、コンデンサーのごとく電流が民衆と政治家の間で相互に流れる。これが民衆と政治家の間の一番基本の形なのだろうと思うのです。世論の声に政治が動かされる、あるいは政治に世論が感化されるというのは、そういうことだと思うのです。これは日本だけではないですけれども、近年の政治というのは、欧米においても世論の波の中に浮ぶコルクの栓のようだと言われます。私もまさにその通りだと思うのです。政治家も一見カッコイイことを言っているように見えることがありますが、よく見て聞いて、ある程度の時間をとって見てみると、やはり選挙に当選するためにはどうすればいいのだという話になってきて、選挙の基盤の弱い人から、やはりものすごく民衆からの影響を受けやすくなってくるというように感じるのです。

むしろ組織票だとか業界の金だとか、組織やお金で動いている政治家というのは、あまり民衆の声を聞かなくても自分が当選すると思いますから、高をくくったようなことを言います。しかしそうでない人たちほどやはり本物の民意、民衆の力、声というものを背景にしなければ政治家になれませんので、非常に強力にコンデンサー効果で、民の声をフォローしようというようになっていると、私は見ていて思うのです。そして今まさに組織票なんていうものはどんどん当てにならなくなってきているし、業界と政治の関係も昔みたいにいかなくなっているわけです。ですから政治の重要な課題が一部の政治関係者と利害関係者が創る闇に潜ってしまうことがあります。原発関係などまさにそうです。しかしこれを打破するのは結局、民衆の力、民衆のエネルギーが政治を動かして、関係者をいたたまれない状態に追い込んでいくこと、これが現代の民衆による現実的な政治運動というものだと思うのです。

実はよく考えれば民間の会社でも事情は同じなのです。お客さまの声を反映して会社を動かすとか、株主の声を反映して会社を変えるとか、これは全部コンデンサーの効果です。あるいは学校の運営もそうです。親、子ども、地域住民の声を反映して学校の運営をどうするか。これも全部コンデンサーの効果で、利益誘導やお金でつながっていないのだけれども相手の変化を促していくということなのです。

ということは、結局のところ民衆が動かなければ政治は変わらない、民衆が政治に対してエネルギーをぶつけないと政治は変わらない、そう言ってもよいわけです。ここは非常に重要なところで、これまでの時代、民衆は政治のお客さんとして政治家が何かしてくれるのを待っていればよかった。そして民衆もまるで芸者を選ぶかのように政治家を面白おかしく選んでいればよかった。しかし今の時代、いくら待っても全然政治がうまく回らない。民衆の生活もよくならない。もっと政治にしっかりしてほしいと思う。しかし民衆に知恵はない。特に支援したい政治家もいない。したがって政治家のほうも実はダラけてしまって実質的には何もしようとしない。そのため民衆の苦悩はますますひどくなる。どうも今の日本はこういう悪循環に陥っているのではないかと思うのです。

２、次の総選挙は日本政治の正念場になる

現実的に今度総選挙になるといろいろな人たちが出てきます。新自由主義者も出てきます。しかしどの政治勢力をとってみても、あるいはどのように連立を組んでも、圧倒的に過半数を取る、単独過半数を取るなんてことはほとんど不可能な政治状況だと思うのです。やはりそこにあるのはいろいろな政党がひしめきあって、結局何も決められない状態になるだけだと思うのです。ですからこういう状況でわれわれ民衆が政治家に政治を任しておくと全然物事が進まない、むしろ世の中の変化にますます政治が取り残されて、今よりもっとひどい状態になるだけだと思うのです。やはり民衆の側のコンデンサーの電極板がちゃんと電圧を高めて、政治の側の電極板に電気を起こさせないとなりません。民衆のほうで電圧をかけて政治の電極板に電気を起させないと政治は何も変わらないし、日本再生など全く始まらないと思うのです。

結局このような形で民衆が政治を変えていかないといろいろな不都合が起きるわけです。実際に目の前の総選挙でどの程度できるか分かりませんけども、民衆の力で政治を変えなければ何も始まらないと思うのです。これは比較的今までもそうですが、政治でも比較的うまくいっているのが地方だと思うのです。地方の場合は政治と民衆の間のコンデンサーの関係が、比較的うまく機能していることが多いと思うのです。いろいろな地域ごとの課題というものがありますし、地域ごとの特徴というものがあります。ですからそういうものを生かして地方自治の方は、それでも比較的うまく回っているところが多いのではないかと思うのです。

ただ、地方自治と言った場合、現在の日本のシステムでは、厚生労働省関係のもの、文部科学省関係のものは国が一元的に取り組んでいるので、地方は独自に行動できないことが多いのです。保健、医療、介護、福祉、年金、教育などの分野です。そうすると基本的にこれはもう中央を変えないと、地方が独自に日本再生の舞台を設け、維持するということができなくなってきます。いよいよこれから先、本格的に日本を変えていこうというときに、中央から地方へ本格的に権限を移譲させていかなければなりません。人も移さなければなりません。もう東京だけにとどまって、日本全体を管理するというようなことはできない世の中になっていると思うのです。これからの時代というのは、国家としての最低水準、ナショナルミニマムなどということは言っていられず、生活を支える部分につても地域ごとにどうしようかと自分たちで考えて行動していかなければなりません。

３、日本政府の創造的破壊が必要

やはりここでわれわれはもう一度日本政府の解体的出直し、まさに創造的破壊ということをしなければなりません。政治の大きな流れは地方ごとに本物の地方分権で、もう一度小さな単位でエンジンを取り戻していこうということだし、その反対側に中央の方は創造的破壊をしようということです。言ってみれば今までのように東京で考えたことを地方でやらせるというのではなくて、東京はあくまでもトップリーダーであり、コーディネーターということになります。

外交とか国防というのも実は、もうかなり地方の意識というものが出てきていて。尖閣列島も沖縄の一部、目の前のことでもあります。それから外交についても、特に経済外交ということを考えたら、地域ごとにどの国とどう付き合いたいという意識が湧いてきている。ですからやはり外交とか国防ということについても、実は地域ごとの意識というものがかなり高まっていると思うのです。ですから中央で日米安保の上にあぐらをかくために外交をやるとか、アメリカ軍から中古の武器をいかに大量に購入するかを考えて国防政策を決めるとか、こういうことは許されないと思うのです。

ですからここで日本の政治に同じ政治の世界から風穴を開けようと思ったら、それは地方の力だと思います。安全保障や外交についても地方の力を入れていかなければ、既得権益に安住している連中、日米安保に安住している連中、あるいは外交とか国防における忌まわしき連中を排除することはできないと思うのです。そう考えてくると、やはりここは地方政治を含めた非常に大きなチームを作っていかないと、我が国の地方を含めた政治全体の再生というのはなかなか難しいと思うのです。

先に述べたように、政治にとって今日の問題を微調整で解決するというのは政治の使命の半分にしかすぎません。残りの半分というのは、こちらはもっと大事なのですけども、多種多様な人たちが乗れる舞台を創り、維持し、みんなに活躍の場所が約束された未来を注意深く、戦略的に創っていくことです。だからこの問題、あの問題、その問題とみんな一斉に声を上げてくる。そこまではごく自然なのですが、それらの問題を総合的に解決しようと思ったら、今ここで何かやる、今の時点で利害の調整を行っても、ほとんどの問題は微調整にしか過ぎないのです。問題は未来に向けて解決する、世の中を進化させて新しい未来を創る中で問題をなくしていく、そのリーダーシップをとる、それがやはり大事なのです。

原発の問題も今ここで全部止めるということが非常に重要だと思います。これは緊急の問題です。なにしろ次に大地震、大津波が来たら大変なことになるわけですから。では止めます。次に廃炉はどうするかという話になります。廃炉は重大な問題で、相当な技術開発を行い、様々な分野のエンジニアを養成していかなければできないことです。その上、作業員の人たちの被曝の管理をやりますから、これをいいかげんにやっていると、ここに暴力団が入り込むわけです。そして暴力団が労務者を手配してきて原発作業をやるという部分が消えなくなってしまうわけです。

だから原発の廃炉 1 つ取っても何十年がかりの一大プロジェクトであって、下手なことをすると技術やエンジニアの不足でそもそも廃炉ができなくなるだけでなく、これが悪の巣窟にもなるわけです。あるいは飛び散った放射能の除染も同じで、微生物技術を含めて、今の原子力物理学者以外の人たちの知恵と実績をもとに抜本的にやり方を見直さなければ、いつまでたっても飛び散った放射能の被害を抑え込むことはできません。

それから新しいエネルギーのこともそうです。今の日本は実は石油危機の状態にあるのです。貿易収支を見るとずっと赤字が続いています。これは燃料の輸入が多いからで、天

然ガスを中心に原発に代わるエネルギーをどんどん輸入していますから、どうしても貿易の支払いが増えて、収支が赤字になってくるのです。さらにここでイラン戦争、中東の大戦争が始まればガスや原油の価格は一気に値上がりし、過去の遺産で今、経常収支は黒字になっていますが。これも赤字になる時がすぐ来るのではないかと思います。そうするとやはり根本的に貿易のお金の受け取りと支払い、入と出をどう見るかという話になってきますので、エネルギーについてもこれからどうしようという話を本格的にしなければなりません。

恐らく今一番安くて効果的なエネルギーは石炭だと思うのです。石炭は供給がだぶついているようですし、埋蔵量もかなりあります。ですから石炭を上手に使って当座、原子力や石油の分を賄うことは、私はやればできるのではないかと思うのです。それから言うまでもなく天然ガスです。そしてさらに先の未来は水素エネルギーであり、同時にこれから発展させていくべきなのが再生可能エネルギーです。こういうさまざまなエネルギーを複合的に組合せていくことが大切であって、今のようにエネルギーごとの縦割りに閉じこもり、関係者が自分の分野の予算や売上・利益にこだわることを政治が許しているところに最大の問題があります。これも民衆の力で政治にエネルギーを送って排除していかなければなりません。

こういうことをするには実は各分野にいる優秀な人材を、一本釣りで集めてきてチームをつくるしかないと思います。これはもう政治にしかできないことであって、それが政治の舞台をつくるということなのです。ですからその分野で見識のある人たち、どの分野でもいると思いますから、そういう人たちに大きな方針のもとに自発的に出てきてもらって、新しいチームを創って、そこに権限を持たせて。今までの組織から新しいチームに、政治の舞台づくりと推進の場所を変えていくということがどうしても必要だと思うのです。しかもそれは今の問題に限る、今ここで何かすればよいという話ではなくて、非常に長期間にわたって継続的に行動していかなければならないことになりますから、やはりそれには本格的なリーダーシップ、チームワークの体制を整えていかないとだめなのです。

４、安定した政治を取り戻すには

そうするとはやりこれは一過性の選挙で浮ついて、「今回は選挙で勝ちました、次はダメです」というような姿ではまったくダメで、やはりそこには安定した政治勢力を作らなければならない。それにはやはり民衆の力がどうしても必要なのです。

しかし同時に安定した政治勢力というのは、人々がその政治の流れに沿って実際に生きてみて、「ああ、これなら大丈夫だ」という実感を持ったときに初めて生まれてくるものだと思うのです。近年これは日本だけでなく外国でも同じなのですが、圧倒的な熱狂で当選して、その 1 年後には史上最悪の支持率になっているというようなことが実は非常に多いのです。アメリカもオバマ大統領は個人的人気もあって支持率が高いですが、アメリカの連邦議会の支持率をご存じですか。十数パーセントなのです。だからアメリカの連邦議会

議員というのは、国民から相当嫌われているのです。しかもこの支持率が上がる気配がまったくないのです。上院も下院も、民主党も共和党も、連邦議会に対する国民の信任は極めて低い。だからこれが米国の政治の現実なのです。

日本もやはりそうだと思うのです。どうもならないです。だから今の国会議員に全部任させておいてもダメだし。逆に言うと怪しい商売でしょう、国会議員などと言うと。ですからまともな人は近づかないわけです。まともな人は近づきませんから、ますます議員たちはタコつぼに入っていって、物事が進まなくなるわけです。やはりこれはコンデンサーの原理で、民衆の方が先に積極的に考えて行動して、民衆の方がチームを作って、それでコンデンサーの原理でこういう流れであれば政治家も当選するのではないかと。こういう政策を打ち出していけば選挙に勝つのではないかという環境を、まず民衆の側から作るということが私は何よりも大事だと思うのです。とにかく今の時代、政治家というのは世論の波に浮ぶコルクの栓ですから、やはりまず波を起していかないとコルクの栓は動きません。ですから民衆の方から「こうあるべきだ」、「こうしよう」と、これは幅広く一部の政治団体の発想ではなくて、幅広く多くの民衆がジワッとそう思うように持っていくということが大切で、自主的ながら政治の基盤を創るのは民衆だというように思って行動していくことが、ほとんど唯一の今の政治の打開策ではないかと思うのです。

５、経済の立て直し

一方、経済についても事情はほとんど同じだと思います。今、世界では国際金融市場において日本の原発廃止と同じようなことが行なわれています。それは大手金融機関の問題です。すなわち大手金融機関が０７年のサブプライム危機から始まって、デリバティブズの問題、それから最近の考えられないような不正の数々で、政治的にまさにお取りつぶし寸前の状況になっています。HSBC 銀行がメキシコの麻薬カルテルのマネーロンダリングを長年にわたって支援していたとか、イギリスのスタンダートチャータード銀行が金融制裁を受けたイランとの間の闇取引を 6 万件、19 兆円もやっていたとか、考えられないようなことを彼らがやっていたことが次々と暴露されました。これはまるで原発のごとき激しいエネルギーで世界を動かしてきた大手金融機関が、まさに原子炉のメルトダウンと言っても良いような巨大なバブル崩壊とそれに伴う世界大恐慌を引き起こし、その上、不正な取引を繰り返し、もはや国も国民も彼らの存在そのものが許せないというところまで事態が進んできています。これは欧米版の原発廃止、東京電力解体で、原発を非常に危険な国際金融市場、東京電力を各国の最大手金融機関と置き換えればまったく同じ構図が見えてきます。そして最終的には昔と同じように銀行と証券を分離して、銀行の部分は預金を取って融資をするだけ。その融資もヘッジファンドのような危険なところには投資してはいけない。自己勘定による取引も禁止。そしてリスク回避のためのデリバリティブズ取引すら禁止。さらに大きすぎて潰せないということは危険だから、銀行そのものを小さく分割して、失敗した銀行は潰れて退場できるようにする。言ってみれば現在の危険で不正な国

際金融システムを 60 年前、70 年前に先祖返りさせてしまおう話です。

そして証券の部分についても、今までのように銀行から巨大な資金が調達できない、投機的な金融商品はデリバティブズを含めて厳しく規制される。要するに現在の国際金融システムについては、それはまさに大暴落という破局が免れない極めて危険なシステムであり、そもそもそれに携わる人たちのモラルが低すぎてとてもこの危険なシステムを彼らに任せることはできない、そして国際金融システムの破綻は国家の破たん、世界の破たんを招くから、政治的にそれを容認することは到底できない。そういう結論になってくるわけです。ですから欧米も結局は現在の国際金融システムの創造的破壊を行おうということで、本気で動いているわけです。

要するに経済全体についても維持不可能なもの、破たんを避けられないものについてはここでいったん全部排除する。その上で破たんしなくて済むような選択肢の中から次の経済システムを考えるということが、何よりも今大事だと私は思うのです。繰り返して言うならば国際金融市場における相場の大暴落は金融の破綻を引き起こし、金融の破綻は産業の破綻を引き起こし、莫大な数の失業者が生まれ、それが生活の破綻を引き起こし、やがて政治の混乱から内乱や戦争という形で人類の生存や地球の存在すら破局に陥れる可能性があるのです。国際金融市場を世界の経済成長エンジンの中核に据えて、まるで原子炉のようなものを据えて、そこから出てくる巨大なエネルギーで新興国を開発して先進国並に近づけていったという、このとてつもないこの 30 年間の経済ブームというのは、実はこれそのものが持続不可能なもの、最後の破局が免れないものだったのだということを今改めて我々は思い知らされているわけです。今から８０年前の世界大恐慌のときにそのことをよく悟ったはずなのにいつの間にかそれを忘れ、また同じかそれ以上にひどい過ちを犯してしまった。それが今の状況なのです。

そしてその産業破綻の連鎖の中で中小零細企業は潰してしまって、大企業に全部統合して極々限られた商品だけを、いかに安いコストで生産するか。これだけやっていればよいといった安易な経営のやり方。それから貧富の格差を広げても構わない、むしろどんどん広げていこうではないか、お金を持っている人が実権を取ればよいではないか。お金は金融市場で運営すればよいではないか。銀行も与信にこだわるのではなくて、とにかくファンドを売ればよいではないか。そういう極めて安易な経済運営とそれを許した政治の結末は今まさに我々が見ている日本の現状です。大企業を中心に何万人単位のリストラが行われ、貧富の格差はますます拡大してもはや住宅ローンを新規に借りられる人がほとんどいないほど人々は疲弊している。そして政治も、国民からも外国からも完全に見放されて漂流を続けている。これは全部やり直しですね。少なくともこの 30 年間に改悪したシステムはまさに持続不可能、破局を免れないものであり、これをまったく作り直さなければならない、それが現在の経済の現実だと言ってよいと思います。

日本は何とかこの立て直しをしなければいけない。政治家はこんなことはまったくわからない。だからやはりこれは、実力と見識のある民衆が立ちあがって動き、政治にエネル

ギーを送って政治を動かし、本格的な日本経済の渦をおこしていかなければならないのです。振り返ってみれば敗戦直後の日本もそうですし、1930 年代前半のアメリカもそうですが、経済恐慌の一番すごいところをなんとか持ちこたえて次につないだのは、やはり民衆なのです。今回も経済の一番厳しいところは民衆が自ら支え合うしかない。実際に日本は特にこの 20 年ぐらい、見識と実力のある民衆がこのとてつもないデフレ経済の中でたくましく日本経済を支えてきたわけであり、それはもう疑いようのない事実だと思うのです。本当の実力を持った中小零細企業の人たちが、持続不可能で次々に破局の波が押し寄せる世界経済の現状に対して、独自性を守るかたちで自分たちの強みを維持、発展させて今日まで動いてきたことは、疑いようのない事実だと思うのです。ということはやはりここで 15 年、20 年続いてきた、必死に守られ続けてきた強みというものを土台にして、次は政治がその強みに花を咲かせるかたちで大きな舞台を創り、運営すること、それが政治の非常に重要な役割だと思うのです。すなわちこの２０年間の激しい経済不況を乗り越えてなおかつ元気のある中小零細企業を日本経済再生の舞台に乗せ、政治のリーダーシップで先に述べたような新しい仕事を次々に創造していく。それが本物の日本経済再生政策というものだと思うのです。

もうここまで来ると、世界はある意味で同じようなレベルになっているわけです。すなわち国内に貧富の格差があるにせよ、文明の恩恵がどこまで世界に行き渡ったかということを考えれば、20 世紀までの文明の利器、文明の光はもう地球上津々浦々まで行き渡ったと思います。ですからこの後は原子力に代るまったく新しいエネルギーのようなもの、あるいは砂漠の緑化から始まる全く新しい農林漁業など、今までにはまったくない社会基盤、インフラを、日本国内のみならず世界中に広げていくということがまず大事です。そしてそれと同時に雇用を確保しなければなりません。それぞれの地域の人たちの生活を持続可能なかたちで達成させていくというためには、先述のように世界中どこでもまず町や村の再建、都市と農林漁村の再建というところから始まって、その町や村を支える競争力、特産物、特技というものを、時間はかかっても必ず育てていかなければならない。

まさに世界中の山々、谷々、町や村が世界に一つだけの花を咲かせるようなかたちで、元気をもう一回取り戻させる。そのために必要な、何に特化すれば大丈夫なのか、何を育てていけばこの村は食えるのか、これを見極めて人を説得して、そして教育して投資をして、実際にそこで経済が回るように、お金が回るように融資を行い、生活が成り立つようになるまで話を詰めていく。これは非常に重要な政治の力だと思います。まずそういうことを日本は自分の国のなかでやらなければいけない。同時にそういう日本の成功というものが達成できたならば、今度はそれをまさにある意味では競争力として、世界中にその恩恵を広げていって、世界の混乱を治めていかなければいけない。結局今世界に広がる戦争も、突き詰めれば食えないから起きるわけであって、みんなが安定して、まさに破局を回避できるやり方で安心して飯が食えると判断すれば、それは戦いはだんだん止んでいくと思うのです。そういうところまで政治が経済について大きなパラダイムシフトを引き起こ

していく。それが今何よりも大事なことだと思うのですね。

何か経済というと金を稼ぐという部分がクローズアップされて、まるで２０世紀の拝金主義のように聞こえるかもしれませんが、古来、衣食足りて礼節を知るという言葉があるとおり、現実には安定した衣食住が整わないと、そのほかのことは全然よくならないのです。ですからここで経済の再生を考えるときには、稼ぐというより衣食住を整えるという話を先に言った方が誤解がないと思うのです。衣食住を整えると次に教育はどうしよう、医療、介護、保健はどうしようという話になる。だから社会を進化させて衣食住を整える部分と、今度それによって生まれたある種の余裕によって教育や社会保障その他を考えてつくり直す部分と、すなわち経済と生活と、日本再生にも２つの部分が出てくるわけです。

そしてその過程で外交や国防の話が必ず出てくると思うのです。結局この大混乱の時代ですし、外国との関係と言っても実質的には国内と同じなのですが、非常に多面的な発想と行動が必要になってくるわけです。ある部分は非常に危険で一触即発である。でも同じ国との間でぜんぜん別のところで仲良く商売をしている。こっちの地域は商売をしているけれど、こっちの地域は商売をしていない。こういう現実がたくさん出てくるわけです。すなわち２０世紀のように国民国家として外交や国防が完全に統一的に運用されているということはもはやなくて、ソ連が崩壊して各共和国が独立して、各共和国ごとに独自の外交と国防が始まったように、日本も各地域の実権が高まっていって、各地域ごとに経済と生活と外交と国防を一体で運用する時代が来る、私はそう思っています。

ですから組織ではなくて、その中の人に焦点を当てたときに、日本にはまだたくさんの人的資源が残っていると思うのです。ですからこれを外交、国防、経済、生活においても一体のものとして、国と国との関係、国内外の関係を総合的にどうするかという大きな視点で戦略を未来に向けて考える、そのチームをどうしても今つくらないといけないと思うのです。

もう今の政治の枠組みの中でいろいろな権力闘争や総選挙をやっても、それで物事が決まるということはないと思うのです。やはり今の政治の枠組みの外側から固めていかなければいけないと思うのです。それには民衆の力を結集しなければならない。何度も繰り返しますが、とにかく今のわれわれ、特にこの30年間の時代にできあがった世界の経済体制、政治体制の上で暮らしている人々は、その体制が持続不可能なのだということに、急速に気づき始めています。ということはここで新しい体制を創るしか、われわれに未来はないということなのです。このままじっとしているということは破局を意味するのだということを、われわれはしっかり認識して、そのわかった民衆から先に飛び出して、みんなでチームをつくって、新しい日本の舞台を創るしか道がないと思うのです。

（第３章　日本再生は２１世紀の新しい文明の創造である）

１、日本の歴史が示唆すること

ここまでのところで我々は今の日本政府の創造的破壊を行い、新しい政治が新しいチームを創って、新しい日本を未来に向けて再生させていかなければならないということを述べました。ではその日本再生という言葉の具体的な中身は何なのかということですが、私は実はそれは２１世紀の新しい文明を創るという言葉と同じではないかと思うのです。日本再生といった時に、日本を昔の状態に戻す、壊れたところを原状回復する、復旧するというように考えると、これは上手くいかないと思います。もうここまで物質的にも精神的にもいろいろな意味で変わってしまった日本ですから、たとえ２０年前であっても、そこに戻そうということは不可能だと思います。ですから日本の再生というのは決して昔に戻すということではありません。あるいは、何か、新自由主義者が言うような、何か特別な状態に日本をもっていくことが、日本の再生というわけでもないと思います。強烈に市場原理主義が吹き荒れて、猛烈に弱肉強食が広がる世界に日本をもっていくことが日本再生だなどということは全くあり得ませんし、中国などの新興国の真似をするということでもないし、アメリカの真似をするということでもない。世界中が今の時代の矛盾にのたうちまわっているのですから、この期に及んで世界のまねをするということは日本の再生には全くならないと思います。やはり我々は前に進むしかないと思います。何度も繰り返しますが、政治というのは未来を創るための舞台を作り、維持することであり、今の問題は未来を創りながらみんなで世の中を進化させて解決していく、これが世の中の発展の一番基本的な原点です。したがってそういう意味から言っても日本の再生というのは、実は世界でまだ誰もやったことがない２１世紀の本格的な文明を創造することなのだ、新しい文明を創り出すことなのだ、と言ってよいと思うのです。ということは、今の日本の政治の一番大きな課題は、２１世紀の文明を創るためのチームを創るということに尽きるのではないかと思うのです。

日本の歴史を振り返ると、開国と鎖国の歴史がずっと続いていることに気がつきます。開国、鎖国、開国、鎖国…、まさに呼吸のように、開国と鎖国がずっと繰り返されてきたのが今までの日本の歴史です。そのなかでこの２０年間くらいは極端な開国の時代と言ってもいいかもしれません。開国し過ぎて中身がみんな外に出てしまったという感じすらあるわけですけれども、やはり、開国の後は鎖国なのです。鎖国というのは決して外国との交流を閉ざして国の中に立て籠ってしまうというわけではなくて、開国の時代に外国から取り込んだものを、それまでの歴史の中ではぐくまれてきた日本と統合して、自分の血となり肉となるように新しい日本を創る、それが鎖国の時期に日本がやってきたことなのです。振り返れば、例えば、日本の風景によく似合っている稲作にしろ、お寺にしろ、これらは実は外国から来たものなのです。日本というのは昔から外国からいろいろなものが怒涛の如く入ってくる時期がある。しかしそれを異質なものとして排除するというよりも、日本人は好奇心が旺盛なようで、入ってきたものは入ってきたものとして、その中で良いものだけを選り抜いて、自分の遺伝子の一部にしてしまうという力を持っています。ですから結果的に日本には今までの時代の非常に良いものが連綿と残っていて、それらが日本

の中で見事に一つに融合して、今の時代に生きている。これが日本の大変力強いところだと私は思うのです。

それから民族ということに関しても、日本列島には古代、世界中からいろいろな人種、民族が集まってきて融合し、日本人というひとつの民族を創ったことはまちがいありません。普通はいろいろな人種、民族が集まればそこに戦いが起こり、支配と従属が始まって、どの民族が他の民族を支配するかということが歴史の原動力になるわけです。しかしそれが日本人という名前で古代にひとつの民族となり、ひとつの国を創ってここまでやってきたというところがこの国の特徴です。アメリカも実は今、さまざまな人種、民族が混血して、アメリカ人としか言いようのないアメリカ人がどんどん増えてきています。昔は私はワスプですとか、私はアジア系ですとか、私はヒスパニックですとか、人種、民族の出身が極めて明確だったのですが、最近は急速に混血が進んで、自分の出身がどの人種、どの民族だと明確に言えないケースが増えています。だからこそ極右勢力が出てきて、それは困るということで大いに人種差別キャンペーンを張ったりする訳ですが、人種差別キャンペーンが活発になるその半面に一つある現象というのは、外国人が増えているということと同時に、実は人種と民族が急激に混ざってきているということがあるのです。

日本という国にはとにかくいろいろな顔つきの人がいます。太古の昔にいろいろ混ざって、以来、共生するということで今日まで続いてきているのが日本です。実は持続可能性の高い社会、あるいは破局を免れる社会と言った時に、日本こそ結果的に太古の昔から持続的に暮らしている国であり、まさに破局を免れて今日まで歴史をつないでいる、世界でも非常に珍しい国なのです。しかもそれは他の文明社会からずっと隔絶されて持続してきたのでは全くなくて、たびたび外国から怒涛のように文物が入り、人が来て、時には戦争もし、そして残るべきものが残り、今の日本に続いているのです。外に向けて開き、政治も経済も生活もその時々に大きく変わりながら、しかし日本という一つの国として今日まで連綿として歴史を刻み続けている。これが日本という国の本当の姿だと思うのです。

ですから明治以降、その中でも戦後、さらにこの２０年ぐらいの日本は歴史的にも極めて激しい開国、外国の文物の受容のときでした。しかしその外国にもはや新しい勢い、新しい光がなくなっている。ということは当面の間は鎖国、すなわち外国から孤立するというのではなくて、今までの日本に今回入ってきた新しいものを融合させる、そういう時期に差し掛かっているのではないかと思うのです。

２、２１世紀の文明はローカリゼーションから生まれる

ですから、ローカリゼーションという言葉がありますが、これからのしばらくの政治の流れというのは、世界の流行を追いかけるというのではなくて、世界を見ながら日本をどうするという発想になってくるでしょうし、日本を全体というものがありながらも、さて各地方をどうしようということになると思うのです。ですから２１世紀の文明ということを考えた時に、今のように世界のどこかで生まれたものが瞬く間に全世界に広がり、気が

付いたら世界中の人がほとんど同じようなライフスタイルで暮らしているというようなことには、当分ならないのではないかと思うのです。全く同じものを世界中に同時に広げるということを考えると、これはなかなか上手くいかなくて、それぞれの国や地域に応じたローカリゼーションということを丁寧にやっていく。これが一番重要なことになるのではないかと思うのです。そうしないと地球上のどこの国でも地域でも世界に一つだけの花が咲かず、結果的に持続可能性の高い、破局を免れる経済的基盤を確立することが不可能だと思うのです。

やはり２１世紀の文明の形というのは各国、各地域ごとに決まってくるはずで、世界中で過去２０年間が強烈な開国の時代ですから、それまでの自分たちが持っていた文化とか歴史とか、あるいは自分たちの今までの文明というものと、この２０年間に世界中で吹き荒れた大嵐がもたらしたものと、これを融合させて、その国、地域独自の文明の形を創る、それがその国や地域の２１世紀の文明であり、それを丁寧に創っていくということが２１世紀の文明創りということの意味だと思うのです。ですからこの世界に文明の覇権ということは考えられないと思います。外国のお手伝いをするということはあっても覇権ということは考えられなくて、何か自分たちで１セット、これが２１世紀の文明だよというものを創って、「はい、これを買いなさい」、そうすれば上手くいきますよという、正にこの２０年間の延長線のような、そういう外国との付き合い方というのは、もうダメだと思うのです。そんなことばかりこれまでしていたから、外国人排斥運動が起きたりするのです。ですから２１世紀の文明を創るというのは、その国や地域の個性を活かして、なるほどこれなら持続可能であると。ふざけた金融にも頼らない、ふざけたエネルギーにも頼らない。そしてやはりその土地の資源などを活かしますから、その土地の再循環が広がっていく。同時に雇用もある。そして経済的にはその地域が創り出す特産物というものがあって、それが全世界に向けて人々のお手伝いをしますから、それで外からのいろいろな意味でのメリットが入ってきて、その国や地域が持続的に回る。そういう形に世界をもっていくということが非常に重要だろうと思うのです。

ですから、私がここで言う２１世紀の文明創りというのは、ひとつひとつ手づくりだというように理解していただく必要があります。したがって今よく言われているような、世界のいくつかの会社が製造している太陽光パネルが世界を救うとか、近年の大企業の製品を並べただけの環境先端都市が全てを変えるというようなものではまったくないということです。そういうものは道具の一部として当然活かしていくべきだと思いますが、文明の形というように言った場合には、やはり過去のその国、地域の文化、文明、想い、歴史との融合を果たしていかなければなりませんから、同じものが世界中に一気に広がるというわけでは全くないし、むしろその反対で、文明の形も非常に個性的になってくると思うのです。すなわち世界中の各国、各地域がこれからかなり個性的な衣食住の形になっていくと思うのです。正にブータンではありませんが、ものすごく個性的で、なおかつそれが世界に向けて競争力のあるものにならない限り、その国や地域の人たちの持続的な幸せ、破

局を回避できる幸せというものは達成できないと思うのです。したがって２１世紀の文明を創るというのは、ただ単に機械メーカーだとか、技術を持っている科学者に最先端のものを持って来させて並ばせるということでは全くなくて、むしろその反対で、その地域や文化や歴史をわかっている人達がさまざまな道具を自分で集めてきて、地元の良さと融合させて、これが２１世紀に世界に競争力を持って生きていけるだろうというものをつくるということになるわけです。そしてそういう動きが全世界の山々、谷々、津々浦々、町、村、地域、国、大陸とあらゆるところに広がっていって、正に世界中で個の花が咲くような、それぞれ個の花が咲いて世界がまとまっているという、そういう状態が２１世紀の文明というものの具体的な姿ではないかと思うのです。ですから２１世紀の文明を創るチームというのは、そうやってそれぞれの場所で手作りにやっていくものであり、あらゆる分野で進化という過程を促進させていかなければなりません。したがってそれぞれの人が自分の専門や既得権益にとらわれたり、目先の損得にこだわっていてはだめで、みんなが自分の枠を超えて互いに協力し、進化しあえるような舞台を、政治は創って維持していかなければなりません。そしてそのチームのある部分は投資銀行という形で実際にお金を動かし、与信によって長期の投資をまかなうことを仕事にしていくわけです。

３、舞台と実力

このように考えてくると、これから２１世紀の文明を創っていくためには、その舞台と、実力の両方が必要だということが分かります。どの地域で仕事をするかが舞台、そこでどんな専門家が仕事をするかが実力です。実際にこの十数年、日本中に広がった観光立国を見てもよくわかりますが、観光立国で成功しているところは、中と外との協力で上手くいっています。中だけでは出来ない。外だけでも出来ない。中と外がよく協力することによって、はじめて観光立国が上手くいっています。これはこれから先の新しい経済の立ち上げ、２１世紀の文明創りでもまったく同じことで、中と外がちょうど織物のタテ糸とヨコ糸のように上手に織り合っていかないと、物事はうまくいかないと思うのです。ですからそのために地元と専門家の間のコミュニケーション、コーディネートが非常に重要になってきて、恐らくそれが地域に対する国の最も重要な仕事になるのではないかと思います。

そして、今起きている地方の問題、地方の格差の問題などは未来に向けて解決するわけですから、今ここで補助金の割合がどう変わるとかいう話をしても、それは単なる微調整にしかすぎません。本格的な問題の解決というのは未来に向けてやらなければいけないのですから、金ではなくてリーダーシップの力をもって、知恵と情報と言霊をもって腐敗することなく政治をすること、それが大切です。そして具体的なことは地域ごとに、まさに観光立国の延長線上で中と外がチームを組んで、今度は２１世紀の文明を、その地域らしく創造するというようにやっていけばよいのです。

もう一つ今ここで火急の問題が、やはり、私は原発と原発事故のことだと思うのです。もうやはり原発は廃止しなければダメだと思います。こんな危険なことをいつまでも続け

ていると、いつ何が起きるかわからない。今回の福島原発の事故はまだ運が良かった方です。しかしこれもあとの廃炉をどうするかが問題です。そして飛び出してしまった放射性物質の除染をどうするかが問題です。この２つの問題については現在のその分野の専門家に任せていては何も進まないところまでいよいよきました。もうにっちもさっちもいかないところまできました。ですからこの先は人類の英知を結集すると言うか、原子力以外の専門家が、各専門分野を超えて英知を結集し、科学技術を進化させて解決策を見出し、実行していくことしか道が残されていないと思います。さまざまな分野の専門家を融合させたチームをもって、あらゆる可能性を試しながら廃炉と除染を進めていくという一大事業が必要となってくるわけです。もちろん学者も要るだろうし、エンジニアも要るだろうし、事業者も要るだろうし、住民の力も要るでしょう。それはまさに人類がはじめて月に行くことを考えていた時と同じくらいの大きなプロジェクトとして、これから始めなければいけないと思うのです。

そしてその日本の実績は世界中で今後必要になってくることだと思うのです。やはり日本を含む環太平洋圏だけではなくて、世界の至るところで地震は起きています。ですから日本で起きたような原発の破綻というのは、今後いくらでも世界で起きると思うのです。ですから廃炉と除染ということについては、使用済み核燃料の後始末ということも含めてこれから世界中の課題になるはずで、これはまず日本が福島原発の処理ということでとにかく目途をつけるしかないと思います。まず原発を全部止めて、廃止して、それをいかに安全に廃炉し、除染をするか。これはやはり今のこの時代の日本人が、最先端を走って目途をつけなければならないことだと思うのです。これについても私はやはり舞台と実力だと思うのです。まずそういうことをやろうという原発の地元の人たちの想いがなければ行動は始まらないし、廃炉にしろ除染にしろ、それを進めるためには外から実力者が来なければダメです。ところが県知事や村長がいつまでも原発にしがみつきたいと言っているところでは、やはりなかなか舞台は整わないと思うのです。ですからこの先、あらゆる分野で、その地域の意識の高い民衆の人達には、自分の地域の政治にくれぐれも責任を持っていただきたいと思います。やはりその地域の政治が、未来を創る舞台を整えられないということになると実力者はどこからも来ないのです。したがってその地域だけ、どこまでもいつまでも置いていかれるという形になると思うのです。ですからやはりここは地域が日本再生の非常に重要な単位になってきますから、未来を創るためのチームが乗れる舞台を創って維持できるような政治をそこで実現させるべく、上手に人を選んでいただきたいと思います。

それには私は難しいことはないと思うのです。常識的な人を選ぶということが一番大事なことで、常識を貫いてもらう、今までの常識の、今までの政治の非常識をやることが非常に重要なことだと思うのです。そして、今までの政治の非常に大きな弱点というのは、政治家が全部一人で考えてやっているということです。これが大きな問題なのです。すなわち一人では何もわからないし、思惑を持った役人に取り込まれるだけです。だからどう

してもチームをつくらなければダメだと思います。アメリカの大統領選挙がそうですけれど、大統領が共和党から民主党に、民主党から共和党に変わるとワシントンＤＣは革命だとよく言われます。それはスタッフがみんな変わってしまうからで、政治もチームでやらないと無理だと思うのです。しかし何気なくチームで政治をやろうということになると、どこかいかがわしい連中が金と権力を求めて集まってきます。これでは何も新しいことはできないわけで、やはりここは非常に素直な人、よき言霊を発することが出来る人が出て行って、そしてまともな人たちを集めるということです。もちろん世の中の選挙の多くはそういう人が落選して奇矯な人が当選することが多いものですが、本当に日本が行き詰って、本人と本人の半径３メートル以内に危機が来ているとわかれば、有権者の行動も変わってくると思うのです。だから我々は政治を立て直すために最初から王道を行き、有権者の変化を待つということがとても大切なのではないかと思います。有権者のわがままに迎合する政治は、これは国を滅ぼすもとです。ですからここは日本中が歩調をあわせて、変な奴等が跋扈しないような、何かそういう大きなうねりというか、大きな人の輪をつくって、日本の政治を具体的に立て直していくということが大切だろうと思うのです。

もうこれから先の政治には金も権力もないと思うべきです。ということは政治家に残された最後の手段は言霊です。良き言霊の力で世の中の空気を変え、チームワークを創っていくということしか手段が残されていません。インターネットの世界を見ると、一見本当にたくさんの人たちが言いたい放題言っているように見えますが、そこにはまちがいなく言霊の軽重、言霊の善悪があって、広く人々に広がる言霊と、そうでない言霊、良き思いの人に広がる言霊と、悪き思いの人に広がる言霊があります。やはり政治家というのは良き言霊を広く人々に伝える力を持っていなければならないと思います。

３、国会の独立調査委員会で日本政府の徹底調査を

もう一つはやはり今の日本政府をどうするかという問題です。今回の私は消費税の増税に反対です。その最も大きな理由は、きちんと政府全体の状態を調べないでいきなり増税だとか言って、仮にやったとしても、増税すれば不景気になって益々税収は落ち込むわけですから、経済も生活も、そして財政も今よりもっと悲惨なことになることはまちがいないと思うのです。要するに、ここはもう増税などするような時期ではなくて、逆にお金をばらまく時期でもなくて、むしろ政府がどうなっているのかをまず徹底的に調べ上げるということ、これが何よりも大事だと思うのです。要するに政府の全貌、実態を知ることなくして、我々は政府をどうするかという議論を出来ないと思うのです。社会保障と税の一体改革とか言って、そもそも社会保障と財政の実態はどうなっているのか。財務省や厚生労働省が自分の既得権益に沿って適当な都合のよいことばかりを言って、何十時間国会で議論しましたとか形式的なことばかり言って増税しようとしていることは、誠に許しがたいことだと思います。今我々にとって必要なことは、まず政府の全貌、実態を明らかにすること、それに尽きると思います。

昔、ソ連共産党のゴルバチョフ書記長がソ連の改革をやろうとした時に、とにかくあまりにもひどい。これはとにかく有識者というか、まともなソ連人の支援を得なければ改革、はできないと悟り、積極的な政府の情報公開を始めました。それがグラスノスチ、情報公開です。そしてグラスノスチをしてみたらあまりにも政府の内容がひどいので、結局ソ連はもうダメだという結論を多くの人が持つことになったわけですが、それはそれでよいことなのです。創造的破壊という言葉があるように、最後まで矛盾を抱えて破局を迎えてすべてを一度に失うのではなく、再建の見通しが立たなければ壊して作り直したほうが、結局は社会に対する衝撃も少なくて済むのです。会社に行き詰った時に、本当にこれは再建が出来るのか、壊して作り直したほうが早いのか、やはり全体を見て最初に見通しを立てます。これは政府に対してもどうしても必要なことなのです。まず我々は今の日本政府について、これをやらなければなりません。そもそも今の日本政府は財政においても行政全般においても再建が可能な状態なのかどうか。実質的に機能している部分と機能していない部分はどこなのか、それをまず調べ上げなければなりません。政府の改革に関するあらゆる議論はここで一度中止にして、日本政府を徹底的に調べてみなければなりません。

これを今の政治家は出来ないわけです。今の役所も当然出来ないわけです。ですから外からやるしかありません。日本が戦争に負けた時には進駐軍というのがあって、進駐軍がある程度日本政府を調べましたが、今の時代に進駐軍ありません。同時にアメリカももう自国の問題で忙しいし、中国も内政が慌ただしいようですから、日本が外国から圧力を受けて変わるということは当分ないと思うのです。そうなったら我々は自分達の手で政府を調べなければなりません。本物の民主主義の世の中になったということです。そうすると具体的に私は、福島原発事故の時の国会の独立事故調査委員会、あれが一番よいやり方だと思うのです。日本国憲法第６２条に規定されている国政調査権を発動して、衆議院あるいは参議院が設立した独立調査委員会をもって政府の仕事を全部を調べつくす。これは非常に膨大な作業だと思いますが、やはりここでやるべきだと思います。ゴルバチョフだってやったのですから。当時ソビエトは世界最大の官僚国家でした。それがグラスノスチで次々と現実を見せていったわけです。同じことを日本もやればできるはずです。実際にこれは現職の人たちに話を聞いてもよいし、辞めた人たちに話を聞いてもよいし、いろいろな資料やデータを提出させてこれを見てもよいわけです。もちろん独立委員会には守秘義務が課せられていますから、いきなり機密情報がボンと外に漏れるということはないはずで、ある程度安心して調査を行うことができます。同時にこの委員会は憲法が規定する国政調査権に基づいて調査をするわけですから、これを拒むことは誰にとっても非常に困難なことなのです。要するに未来を創るための本当のことを我々は知らなければならない、本当に今のままで日本政府が立ち直るのかどうか、我々は見通しを立てなければならないのです。その見通し、見極めによって、社会保障にしろ財政にしろ、日米安保にしろ何にしろ、これからどうするか決めていけばよいのです。

そうやってこの２１世紀の文明を創るためのチームを創って、具体的に農業はどうしよ

う、資源はどうしよう、林はどうしよう、住宅地はどこにつくろう、製造業はどのしよう、サービス業はどうしよう、職人はどうしよう、土や水の浄化はどうしようというような形で、全部チームを創ってやっていくことが必要です。とにかくこういう時は最初の比較的短い期間に小さな成功を達成して、小さな成功をきっかけに大きな成功に繋げていくことが大切ですから、それをやるためには、やはり実力を持った人が総動員でチームを創らないとダメなのです。振り返れば東海道新幹線だって昭和３４年に建設が始まって、たった５年で営業運転開始になりました。ですから私は今の日本だって本気でやれば十分出来ると思うのです。もしそういうチームを創るということになると、今はみなさんそれぞれ組織の中で働いているとしても、組織がもうダメだと思ったら組織から出てきてもらうしかありません。組織としてこのまま２１世紀の新しい文明づくりに参加出来る状況なのか、あるいはもう駄目なのか、これはやはり自分で考えて見極めてもらうしかないと思います。そうやってとにかくまず人を集めてくることが大切で、自分がどの場所にいるのか、このまま２０世紀の瓦礫の中に埋もれていくのか、傍観者でいるのか、あるいは２１世紀を創るために一肌脱いで一歩でも二歩でも前に進んでいくのか、これをやはり一人一人に決めてもらわなければなりません。

同時にこのチームというのは進化を進めていくことが仕事ですからいろいろな立場の人たち、営利企業も非営利企業も、NPO も NGO も、宗教家も芸術家も学者も、主婦も、老人も若者も、いろいろな人たちが活躍できる舞台を用意しなければいけません。やはり繰り返しになりますが、成功というのはみんなが自分の手でつかまなければいけませんから、だれかが全部絵を描いて、プラモデルみたいなものを用意して、「はい、これをつくって下さい、はい、成功しましたね」というようにやってはダメなのです。舞台を創るというところが大事ですから、ここがやはり結構知恵の要るところなのです。まずひとつモデルケースを創って成功させる。それが成功したのだから次はこれをやってみよう。そういうやり方で成功を広げていくことが大切で、結果的に多様な人たちが巻き込まれていくように考えることが必要なのです。

そう考えてくると次の総選挙後の新しい政治というのは、とにかくこの一番最初の先進導坑を開けるということ、何か今まで誰もやったことも聞いたこともないようなものをつくるということ、そういうことが出来るチームをまず創るということ、それがすべての始まりになるのではないでしょうか。日本再生と言っても、途方もなく先の長い道のりのように思えることがあります。しかし最初の一歩を踏み出して、そこに勢いがついてくれば、結構早く新しい日本の形ができてくるのではないかと思うのです。ここは本当に日本も世界も正念場です。皆さんの力でぜひこの日本を再生してまいりましょう。